

3-2 消費者の食意識状況と事業効果－アンケート分析－

1) アンケートの概要

食生活・食意識の実態を把握するには、当然のことながら「川上から川下まで」の発想が不可欠であり、食材の生産現場から消費市場へのプロセスをフォローしなければならない。しかし、時間的・空間的制約等もあり、本事業では「川下」に相当する消費者の自己評価と食生活の実態に言及する。

加工食品や外食産業の急速な拡大と多様化は、消費者を「食品」への関心を強めているが、食材に関する問題意識を希薄にさせている。その結果として、「有毒含有食物」の発覚事件が報じられた時期のみが、農業、酪農や水産業が抱える問題を顧みるに過ぎず、一過性的な関心を集めるにとどまっている。

こうした風潮を払底し、食材への関心を高めるために、関係省庁は啓蒙的な「食事バランスガイド」を作成し、その普及に努めてきている。しかし、それらの事業の成果を検証するには至らず、野菜の摂取量は下降の一途を辿り、水産業も従業者の激減を示している。

本事業では、①流通現場調査、②食生活実態調査、③小売店舗における食生活改善方策の試行を実施してきた。そのうちの一つである「②食生活実態調査」として、画像データも含むアンケート調査を2回にわたって実施した。アンケート調査を実施するにあたり、「③小売店舗の食生活改善」と連動させようと、店頭におけるイベントや食育講演会への参加者の協力を仰ぐことにした。参加者にA4判両面を用いて、12項目の設問項目を設定した。

これらの回答者・協力者を想定するなら、主婦層が中心となるのは避けられず、さまざまな項目が列挙される属性のうち、基本的属性として年齢構成と世帯構成に絞った。また、社会的属性の中から、比較的プライバシーに触れることが少ない就業状況に絞らざるを得なかった。

次いで、「食事バランスガイド」を参考に、摂取が低下傾向を示す野菜類と魚介類に重点を置き、調査前日の食事状況、平均的な量や頻度、頻度バランスに着目した。上述の①流通現場調査の一環として、「商品表示への着目」と「店舗の情報提供」も設問項目に加えることにした。

以上のような概要を踏まえて、「食意識調査」と「食事実態調査(画像添付)」の2点を目的にした第1回アンケートは2013年9月から12月にかけて実施され、補足的に翌年1、2月に追加調査が行われた。

「食意識調査」では設問した10項目への回答と野菜類と魚介類の嗜好品目を問うた。前述のように、後者「食事実態調査」では3回の食事メニューに写真を添えたレポートを求めた。これらの「食意識調査」アンケート回収票は委員と事務局で整理・分析し、「食事実態調査報告」に関しては栄養士による評価とコメントを回答者に送付し、個別的な食生活の改善に寄与できるように配慮した。

第 1 回アンケート後の 2014 年 1 月から食意識や食生活改善への意欲など認知度等の変化をフォローする第 2 回のアンケート調査を実施した。また、補足的に並行して開催されたセミナー受講生への「簡易アンケート」を実施した。

なお、全体的なアンケートは店頭イベント、講演会への参加者や店内購買客への無作為配布によって実施され、簡易アンケートに関してはセミナー参加者を対象にしている。

2) アンケート実施状況

こうして、2013 年 9 月 12 日を皮切りに、翌年 2 月 27 日のセミナー最終日に至る 5 カ月間をかけて、アンケート用紙の配布・回収を進めた。

この結果、第 1 回アンケートは 284 件の回収があったが(表 3-0-1)、映像データ添付の第 2 回アンケート回収は至難を極め、電話・メールによる数度の回収要請を実施した。第 1 回回答の 284 名への要請に対して、最終的な締め切りとした 3 月 22 日までの有効回答数は 109 件に漕ぎ着けることができた。また、セミナー受講生への簡易アンケートも実施し、121 件の回収となった(表 3-0-2)。

第 1 回アンケートの回答者 284 名のうち、女性は 243 人(85.6%)を占め、男性は 32 人に過ぎなかったことから、以下の集計に際しては性別を省略している。

年代では 40 歳代 84 人をピークとしたほぼピラミッド状の年代構成を呈していた。世帯構成では 137 名人(48.2%)が夫婦＋子一人という核家族であり、就業状況では 33.5%にあたる 95 人が家事従事である。従って、このアンケート回答者は 30、40 代の核家族が半数を占め、1/3 が家事専業となる。

なお、集計に際しては、性別と年齢を記入しない 10 名や回答が空欄の場合には、無回答件数として削除している。

第 2 回アンケート回答者は総数 121 名であるが、前回同様に男性の回答が僅かに 7 名に過ぎず、集計においては性差を除外した。年齢構成は 60、70 歳代が 87 名を数え、回答者全体の 72%を占めることから、個別の項目別集計は高齢者の動向を反映することになる。就業状況では 10、20 歳代は学生層を大半とする「その他」であり、30～50 歳代では就業は拡散し、60 歳代以上は家事と無職に集中していた。

表 3-0-1 第 1 回アンケート回答者の属性分布

(単位:人)

分 類		10 歳 代	20 歳 代	30 歳 代	40 歳 代	50 歳 代	60 歳 代	70 歳 ＜	不 明	総計
性別別	女性	14	23	59	73	23	27	23	1	243
	男性	1	1	7	11	8	2	4		32
	不明								9	9
	総計	15	24	66	84	29	29	27	10	284
世帯形態別	独り暮らし		3	6	3	3	2	5		22
	夫婦2人	1	1	3	6	6	13	7		36
	夫婦＋子一人	4	14	46	49	13	7	4		137
	三世帯	3	2	5	15		3	2		30
	その他	4	2	3	5	4	2	2		22
	不明	3	2	3	6	4	2	7	10	37
	総計	15	24	66	84	29	29	27	10	284
就業形態別	全日勤務		4	12	11	8	3			38
	パート勤務		1	10	11	7	6	2		37
	自営			4	8	5	4			21
	家事		6	37	33	5	9	5		95
	無職	1	1		2	1	5	15		25
	その他	14	12	3	18	3	2	2		54
	不明				1			3	10	14
	総計	15	24	66	84	29	29	27	10	284

表 3-0-2 第 2 回アンケート回答者の性別年齢分布

(単位:人)

分 類	10 歳 代	20 歳 代	30 歳 代	40 歳 代	50 歳 代	60 歳 代	70 歳 ＜	不明	総計
女性	5	12	7	9	4	29	45	3	114
男性			1	1	2		3		7
総計	5	12	8	10	6	29	48	3	121

3) アンケートの結果と事業効果評価

(1) 食生活への自己評価

① 第1回目アンケートの結果

第1回目アンケートでは、「健康面からみた食生活の自己評価」に関しては、「良好と判断している」が僅かに 20 人であるが、「まあまあ良いと思う」と食生活の現況を肯定的に捉えているのは 167 人となり、両者を加えると回答の 60.9%に達している(図 3-1-1)。

なお、肯定的に評価する要因を 10 項目から問うと、大半が「野菜を多く」「脂肪が多すぎない」と答えており、特に「野菜神話」が特徴的であった。

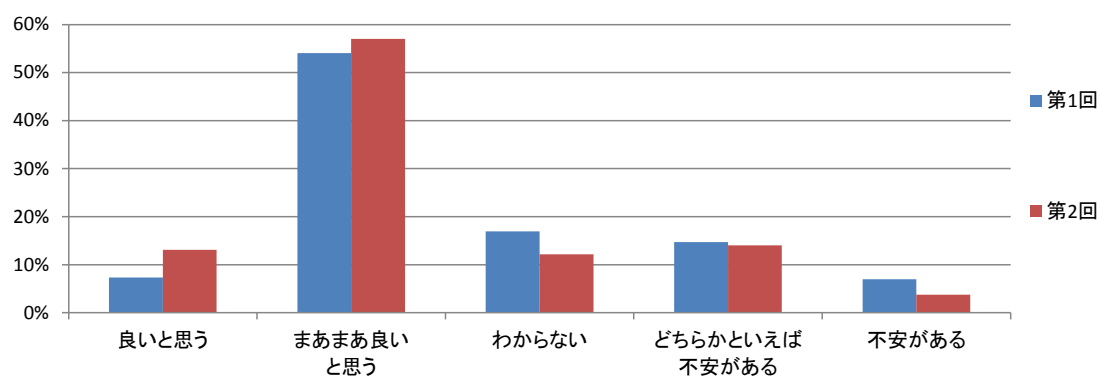


図 3-1-1 第 1 回および第 2 回アンケートの食生活の自己評価の割合

図 3-1-2 が示すように、年代別では 10、20 歳代の青少年層では肯定派と不安派が折半しているが、中高年齢層では肯定的に評価している傾向が顕著である。

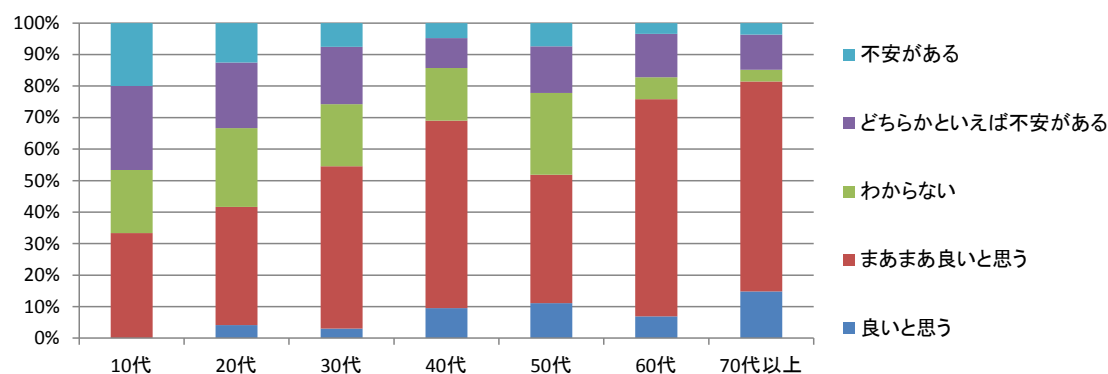


図 3-1-2 年代別食生活の自己評価の割合(第 1 回)

就業形態別の食生活の自己評価をみると、図 3-1-3 および図 3-1-4 の通りとなる。「良い」と「まあまあ良い」という回答が圧倒的に多いのが「専業主婦・家事手伝い」であり、それに次いで「勤め」となっている。しかし、割合構成をみると、「勤め」と「その他」層のものがもっとも低くなっていることがわかり、この 2 つの層において健康な食生活を以下に確保するかが課題であろう。

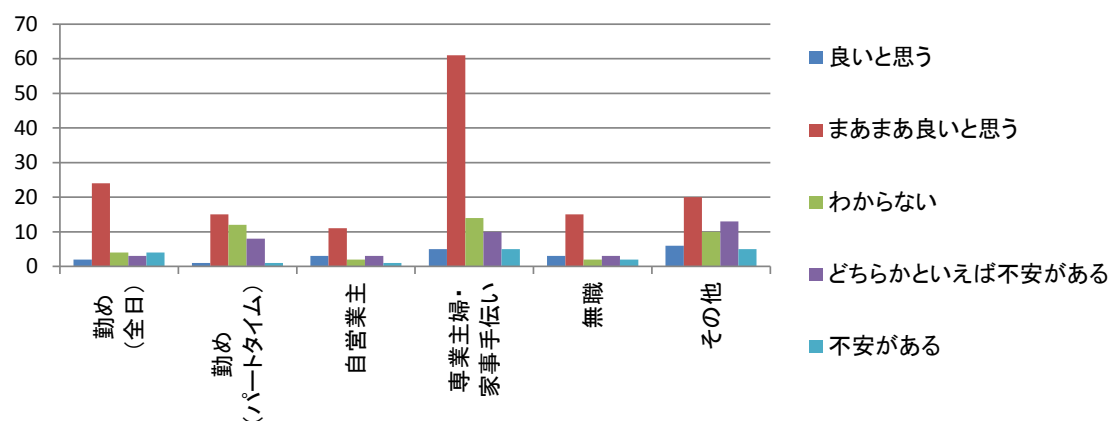


図 3-1-3 就業別食生活の自己評価(第 1 回)

単位：人

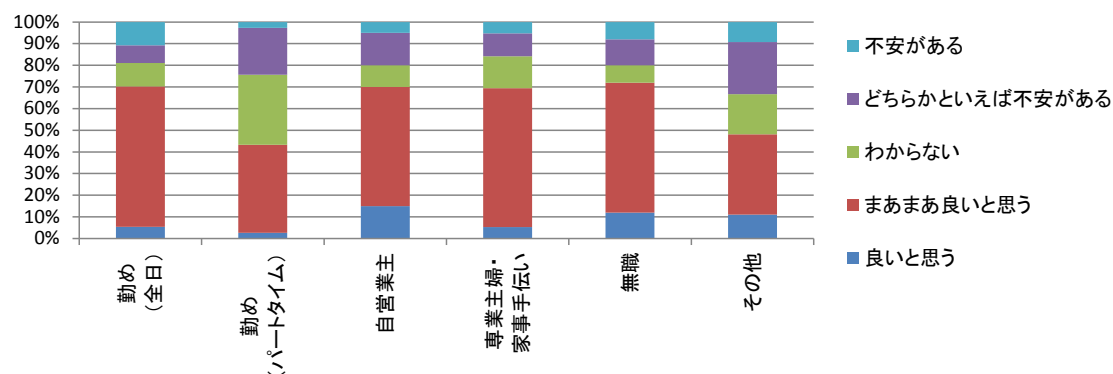


図 3-1-4 就業別食生活の自己評価の割合（第 1 回）

世帯構成別にみると、「夫婦と子ども」世帯という回答者が多く（図 3-1-5）、134 人のうち 94 人（70.1%）が肯定的に答えている。割合構成をみると、「夫婦二人」、「三世帯同居」世帯において健康な食生活を送っている世帯の割合が相対的に高く、「その他」や「一人暮らし」世帯において食生活への不安を抱えている割合が相対的に高くなっていることが伺える（図 3-1-6）

とはいえ、大勢としては世帯構成や就業形態の違いによる評価の比率には大差は見られなかった。

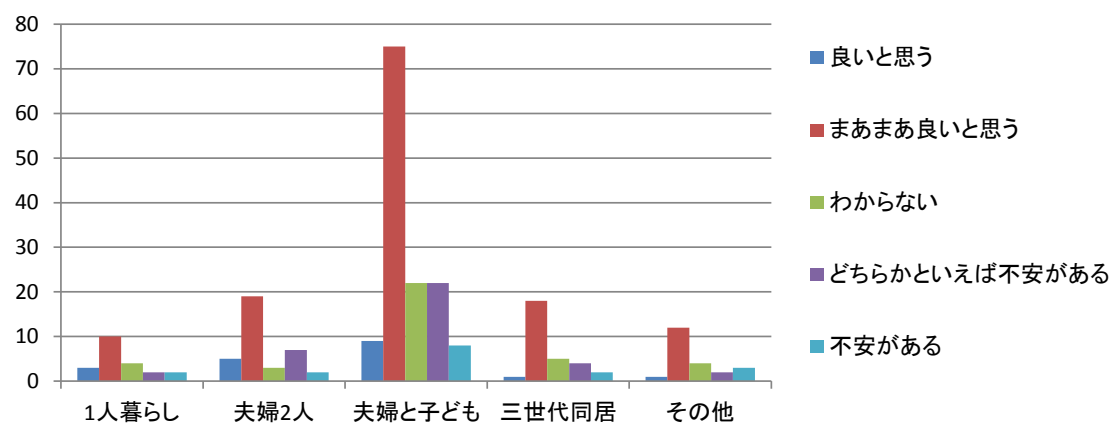


図 3-1-5 世帯構成別食生活の自己評価（第 1 回）（単位：人）

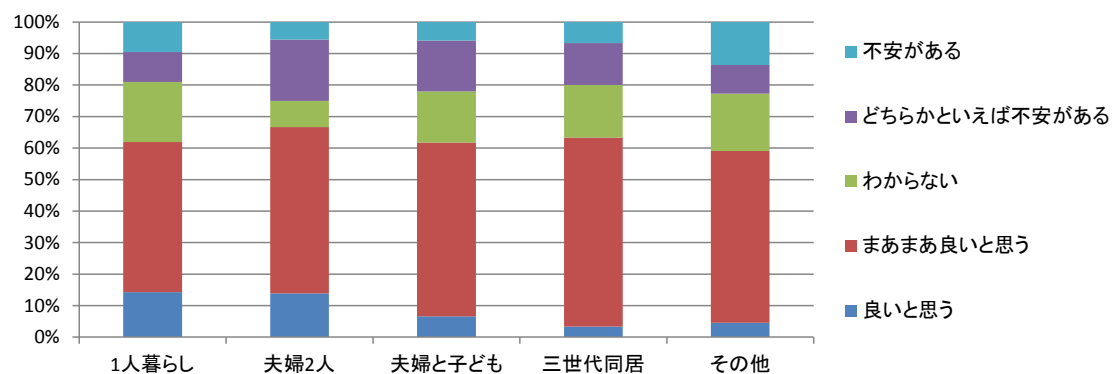


図 3-1-6 世帯構成別食生活の自己評価の割合(第 1 回)

② 第2回目アンケートの結果

第 2 回目アンケートでは、「健康面からみた食生活の自己評価」に関しては、「良いと思う」と「まあまあ良いと思う」と食生活の現況を肯定的に捉えている回答者は 70.4%となっている(前出図 3-1-1)。

年代別にみると、一回目アンケートの結果と同様に、年齢が高くなると、自分自身の食生活への評価が高くなる傾向が見て取れる(図 3-1-7、図 3-1-8)。

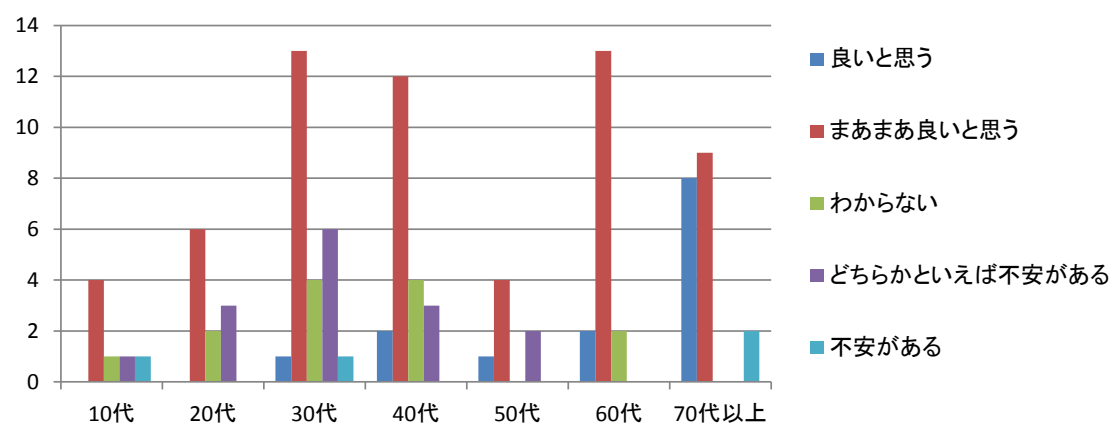


図 3-1-7 年代別食生活の自己評価(第 2 回) (単位:人)

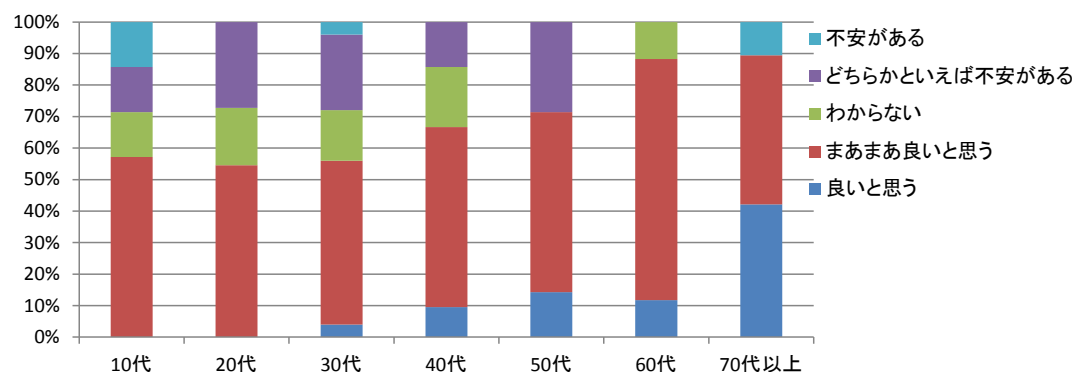


図 3-1-8 年代別食生活の自己評価の割合(第 2 回)

就業形態別でみると、「無職」、「その他」層の安心意識が相対的に高く、自営業者および専業主婦・家事手伝いなどの層の安心意識が相対的に低くなっている(図3-1-9、図3-1-10)。

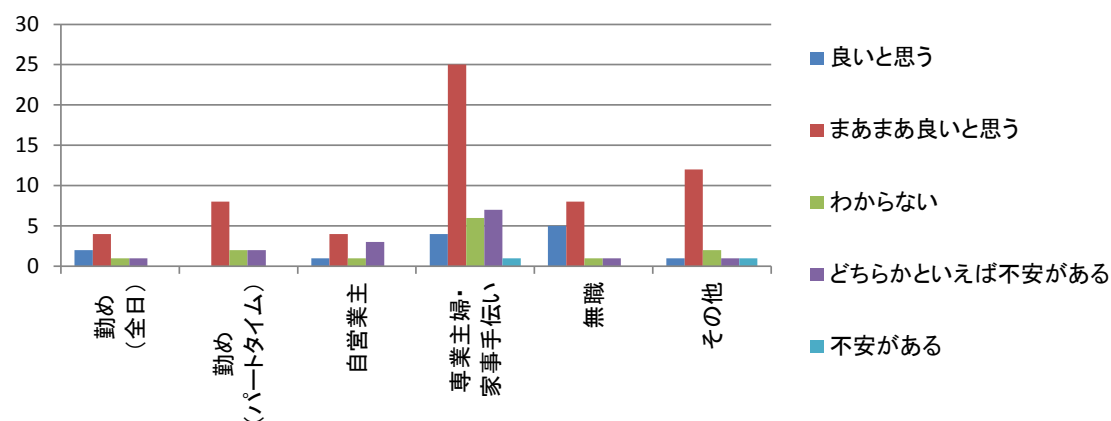


図 3-1-9 就業別食生活の自己評価(第 2 回)

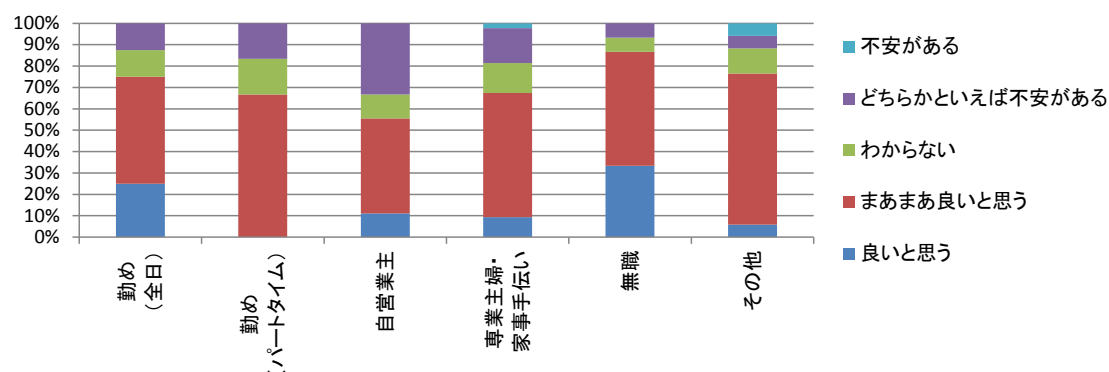


図 3-1-10 就業別食生活の自己評価の割合(第 2 回)

また、世帯構成別の意識差をみると、1 回目の結果とは異なり、「1 人暮らし」や「その他」世帯の意識が高く、「夫婦と子ども世帯」や「三世帯同居」世帯の安心意識が低いこととなっている（図 3-1-11、図 3-1-12）。

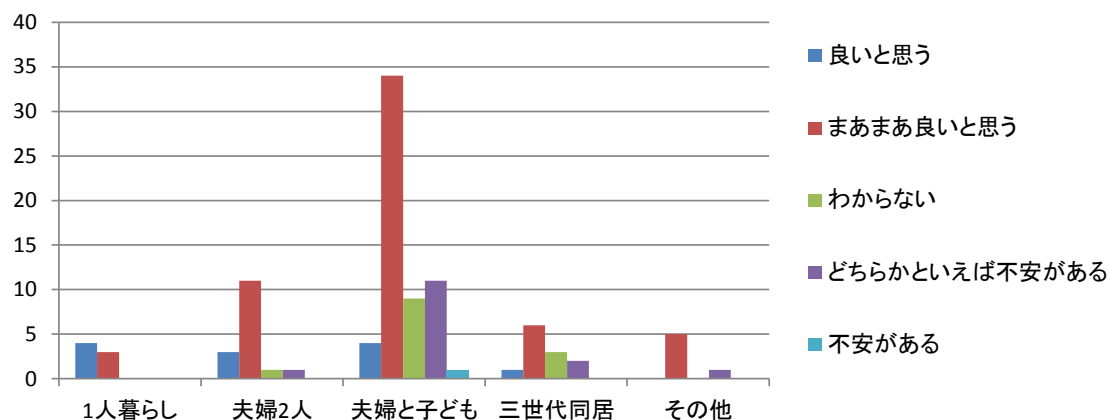


図 3-1-11 世帯構成別食生活の自己評価(第 2 回) 単位: 人

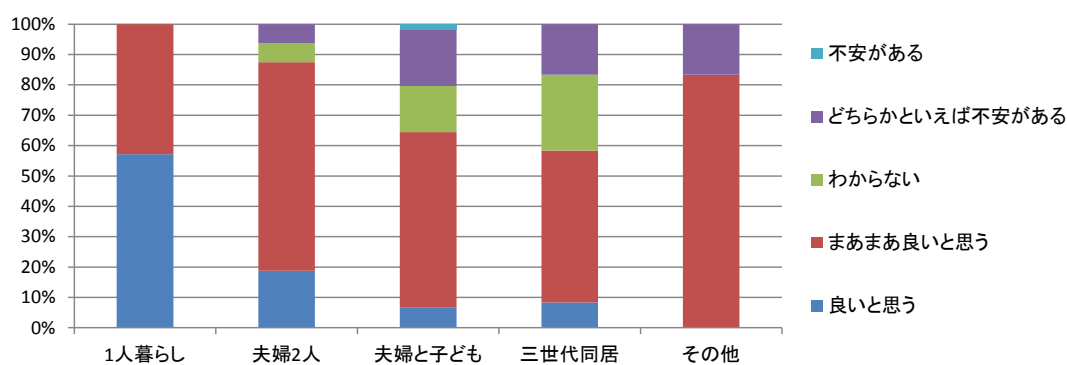


図 3-1-12 世帯構成別食生活の自己評価の割合(第 2 回)

③ 事業効果について

第 1 回目と第 2 回目のアンケートを比較してもう少し詳しく見てみると、年代別ではいずれの年代も「まあまあ良い」という回答が突出して多い。先述のように、第 1 回のアンケートでは、青年層よりも中高年層でその割合が高く、「まあまあ良い」という回答がそれぞれに占める割合は、10 歳代では 3 割、20 歳代では 4 割、30 歳代では 5 割、40 歳代では 6 割、50 歳代では 4 割、60 歳、70 歳代では 7 割である。一方、第 2 回目のアンケートでは、10 歳代で 6 割、20 歳代、30 歳代で 5 割、40 歳代、50 歳代で 6 割、60 歳で 8 割、70 歳代で 5 割という結果となった。

全体としては、前出図 3-1-1 が示すように、「良いと思う」と「まあまあ良いと思う」という二つの層の割合が、10%近く上昇していることが分かった。

(2)「食事バランスガイド」の知見状況

農水省・厚労省が提示している「食事バランスガイド」(2005 年公表、2010 年一部変更)に関する知見・評価状況の知見・熟知度を総括すると、熟知度が高いと判断される「参考になっている(A)」が 15%、「知っているが、参考にしていない(B)」は 22%であった。「内容が理解できない(C)」は 5%であるが、知見度が低い「名前だけは聞いたり、絵だけ見たことがある(D)」と「聞いたことや見たことがない(E)」が 58%に達し、「バランスガイド」が活用しているのは、ほぼ 7 人にひとりに過ぎない。これを年代別に集計すると、青少年層と 70 歳代以上の高齢者層では「知っている」という知見比率が高く、50%を超えている。これに比して、30～60 歳代の中高齢者層では「名前だけ・・・」「見たことがない」という回答が 61.4%を占め、世代間の差が顕著となっている。

第 1 回アンケート回答者のうち、第 2 回アンケートの有効回答者は約 4 割の 109 人であった。A の比率がほぼ倍増し、D、E の比率は減少していることが明らかであった。これは食育に関心を有する消費者の回答数が多かったことを意味しているが、第 1 回アンケートで啓発され、その後には店内の掲示等にも目を向け始めた消費者も増加したことも影響していると推測される。

表 3-2-1 第 1 回アンケート年代別「食事バランスガイド」知見状況 (単位: 人)

年代	A	B	C	D	E	計
10 歳代	1	6	3	3	2	15
20 歳代	3	10	1	6	4	24
青少年層	20		4	15		39
30 歳代	9	16	3	30	8	66
40 歳代	11	18	2	35	18	84
50 歳代	4	4	0	12	8	28
中年層	62		5	111		178
60 歳代	3	1	3	10	12	29
70 歳<	10	4	2	7	4	27
高年層	18		5	33		56
計	42	59	14	103	55	273
構成比	15.4%	21.6%	5.1%	37.7%	20.1%	100%

注) A: 参考になっている B: 知っている C: 内容が理解できない D: 名前・絵を見た

E: 知らない

表 3-2-2 第 2 回アンケート年代別「食事バランスガイド」知見状況（単位：人）

年代	A	B	C	D	E	計
10 歳代		1	2	2		5
20 歳代	1	9		2		12
青少年層	11		2	4		17
30 歳代	1	3	1	2	1	8
40 歳代	2	3		4	1	10
50 歳代	3			1	2	6
中年層	12		1	11		24
60 歳代	9	1	2	10	5	27
70 歳＜	17	2	2	10	10	41
高年層	29		4	35		68
計	33	19	7	31	19	109
構成比	30.3%	17.4%	6.4%	28.4%	17.4%	100%

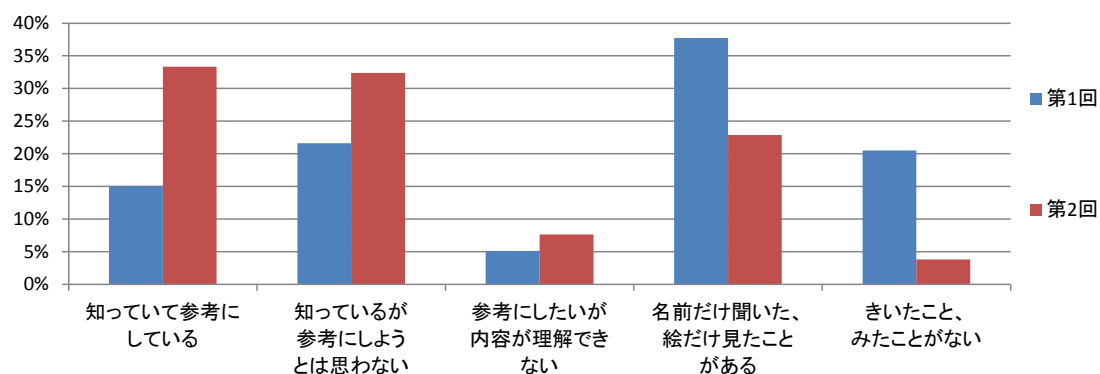


図 3-2-1 第 1 回および第 2 回アンケートの「食事バランスガイド」知見状況の割合

① 第1回目アンケートの結果（「食事バランスガイド」の知見状況）

図 3-2-2 および図 3-2-3 に、第 1 回における食事バランスガイドの知見状況を年代別にみた結果を示した。10 代から 60 代にかけては、年代が高くなるにつれて徐々に意識が変わっていく傾向が見て取れる。「知っているが参考にしようと思わない」については 10 代・20 代が 40%程度と高く、年代が高くなるにつれて、参考にしようという意向が強くなるものと思われる。ただ、「聞いたこと、みたことがない」とする割合も年代が高くなるにつれて増加する傾向がある。ここから、年代が低いと知っていても参考にせず、年代が高いとあまり知らない、という状況にあることがわかる。一方、70 代以上における「知っていて参

考にしている」の割合が最も高く、37%となっているが、他の年代では 10%前後となっている。知っている割合も 50%をこえ、70 年代以上では活用されていることが示唆される。

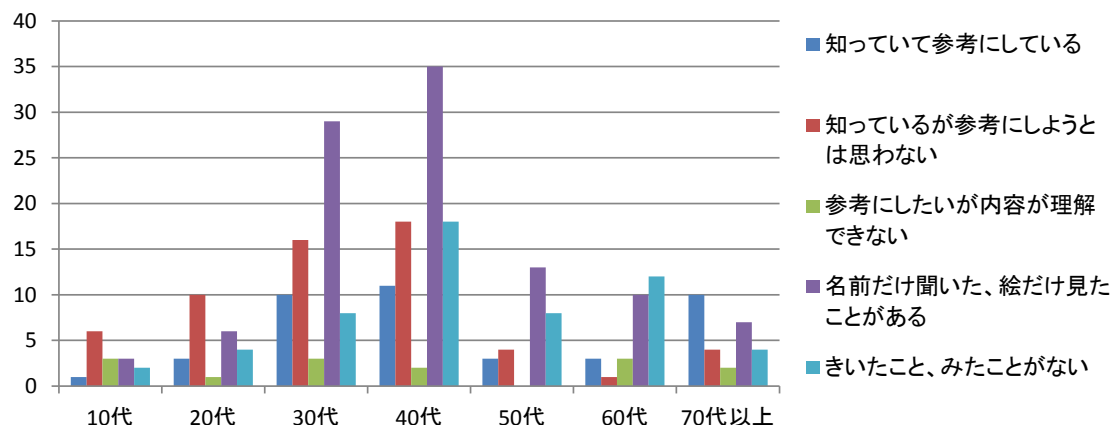


図 3-2-2 年代別「食事バランスガイド」知見状況（第 1 回）

単位：人

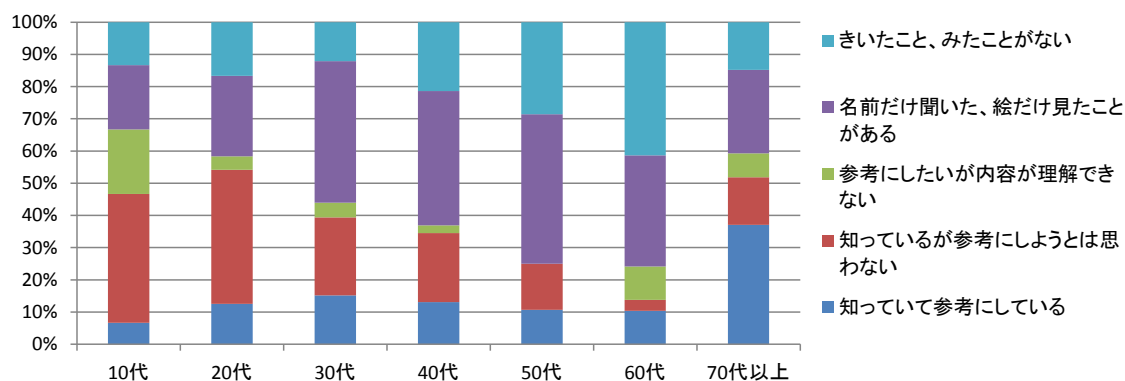


図 3-2-3 年代別「食事バランスガイド」知見状況の割合（第 1 回）

図 3-2-4 および図 3-2-5 に、第 1 回における食事バランスガイドの知見状況を就業別に整理したものを示した。「知っていて参考にしている」の割合が高いのは「自営業主」と「無職」の約 30%であり、それに続くのが「専業主婦・家事手伝い」の約 16%で、その他は 10%を下回っている。「きいたこと、みたことがない」と「名前だけ聞いた、絵だけ見たことがある」の合計をみると、「勤め（全日）」では 76%、「勤め（パートタイム）」では 78%にも及び、その他は 50%程度である。知見そのものについては会社勤めの場合において低いことがうかがえる。

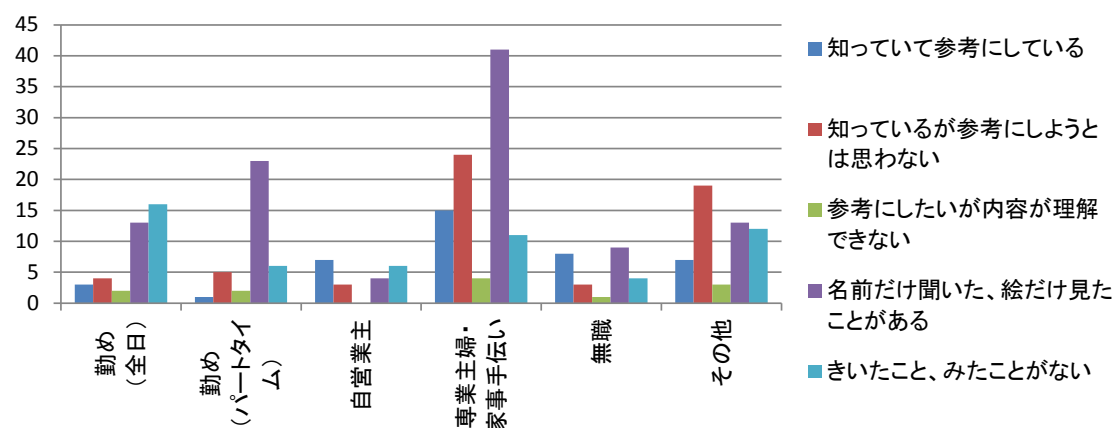


図 3-2-4 就業別「食事バランスガイド」知見状況(第 1 回) 単位:人

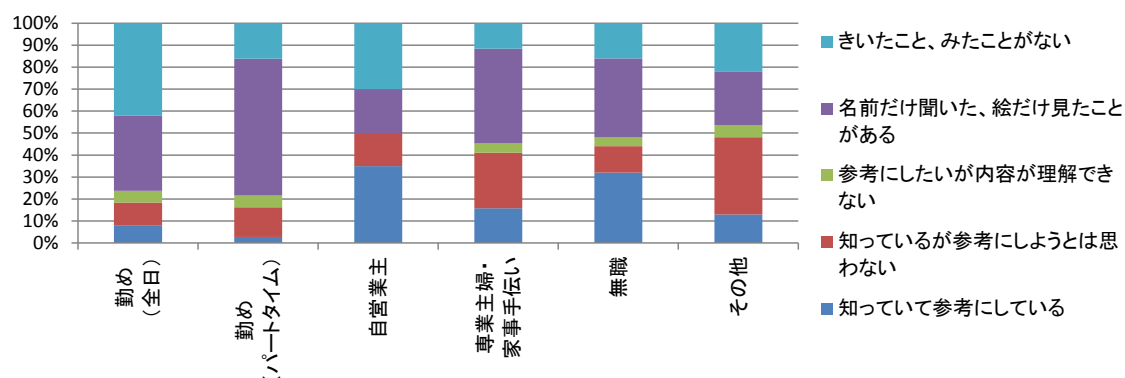


図 3-2-5 就業別「食事バランスガイド」知見状況の割合(第 1 回)

図 3-2-6 および図 3-2-7 に、第 1 回における食事バランスガイドの知見状況を世帯構成別にみたものを示した。「きいたこと、みたことがない」とする割合が最も低いのは「夫婦と子ども」世帯である。一方、「知っていて参考にしている」は「夫婦と子ども」世帯でも 15%程度であり、「夫婦 2 人」の約 20%を最高に、多くは 10%以下となっている。

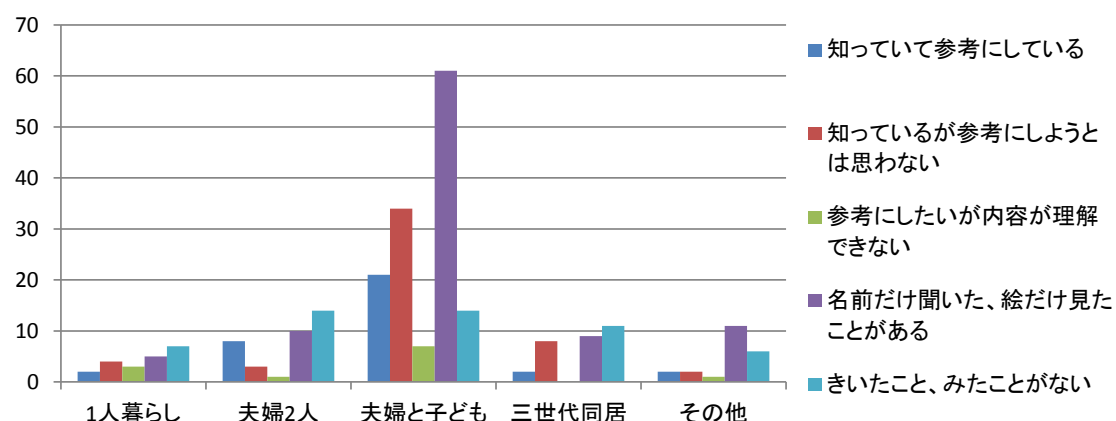


図 3-2-6 世帯構成別「食事バランスガイド」知見状況(第1回)

単位:人

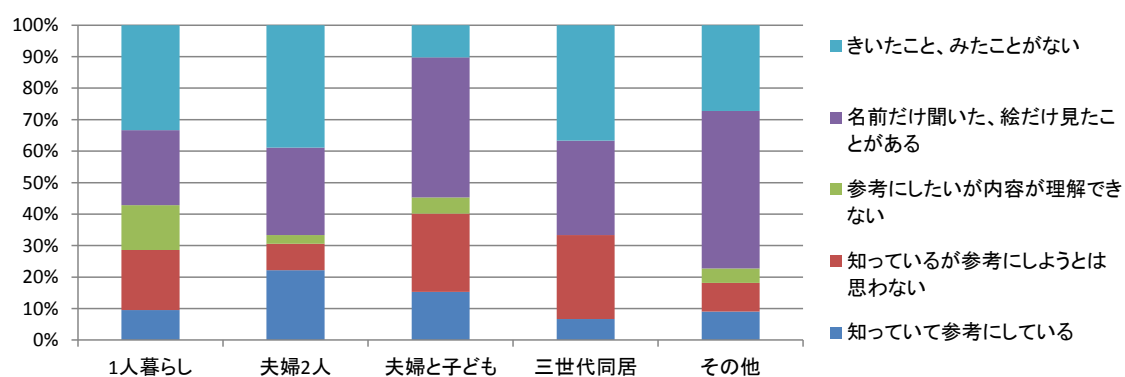


図 3-2-7 世帯構成別「食事バランスガイド」知見状況の割合(第1回)

② 第2回目アンケートの結果(「食事バランスガイド」の知見状況)

図 3-2-8 と図 3-2-9 に、第2回における食事バランスガイドの知見状況を年代別にみた結果を示した。「きいたこと、みたことがない」は低く、全体でも数%程度である。「知っていて参考にしている」の割合は10代と70代以上で高く、30代と40代が低いという構成になっている。

図 3-2-10 と図 3-2-11 に、第2回における食事バランスガイドの知見状況を就業別にみたものを示した。すべての就業形態において、「きいたこと、みたことがない」の割合は非常に低いものの、「知っているが参考にしようとは思わない」の割合が最も多くなっていることが注目される。「知っていて参考にしている」については、「勤め(全日)」と「無職」が相対的に高くなっている。

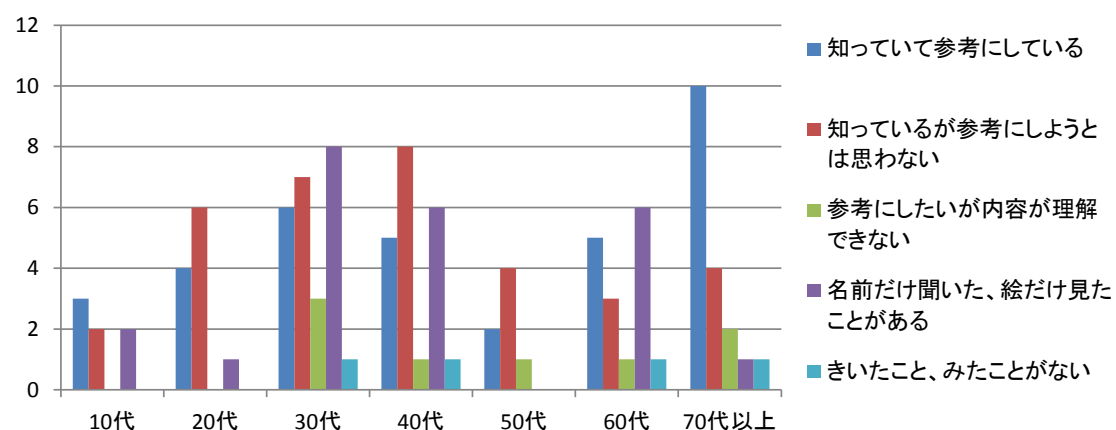


図 3-2-8 年代別「食事バランスガイド」知見状況(第 2 回) 単位:人

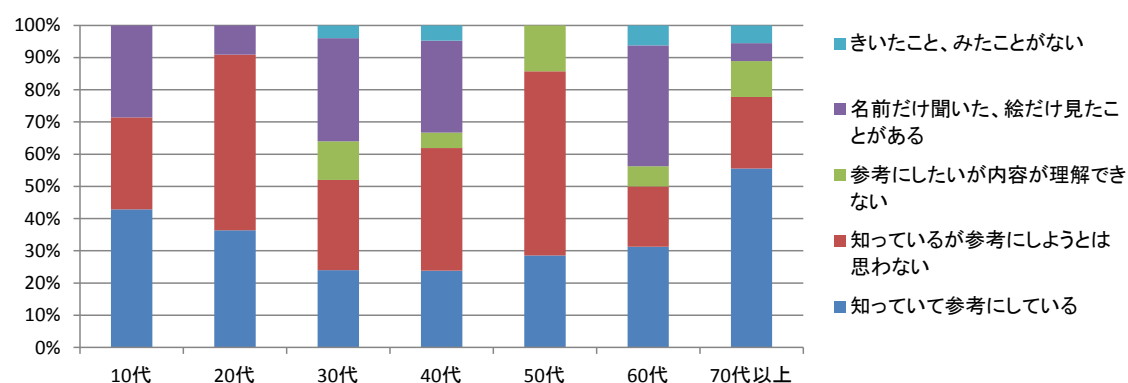


図 3-2-9 年代別「食事バランスガイド」知見状況の割合(第 2 回)

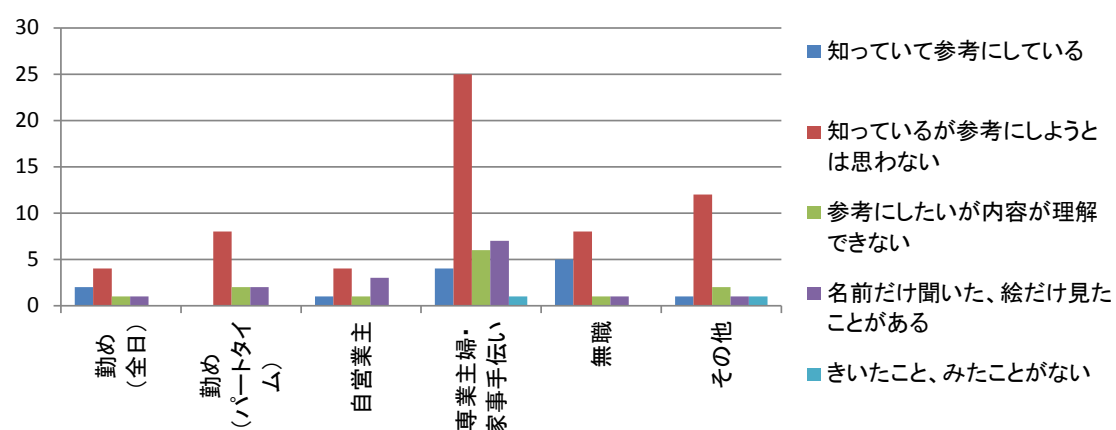


図 3-2-10 就業別「食事バランスガイド」知見状況(第 2 回) 単位:人

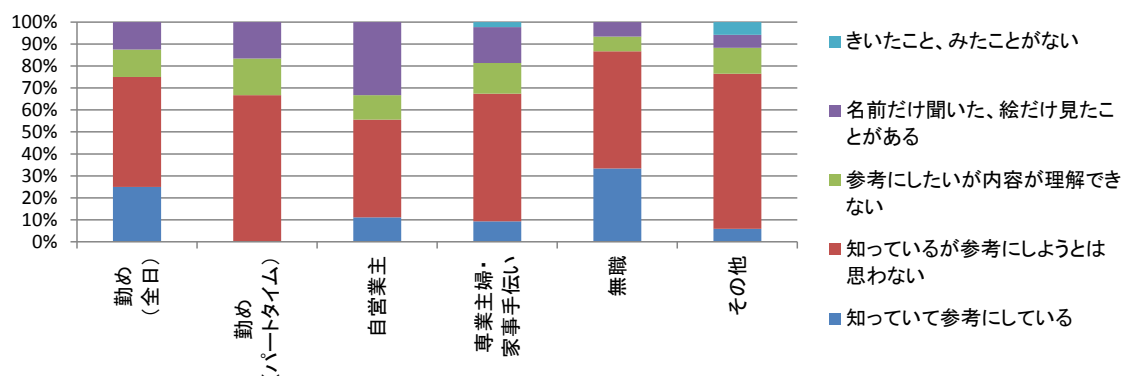


図 3-2-11 就業別「食事バランスガイド」知見状況の割合(第 2 回)

図 3-2-12 と図 3-2-13 に、第 2 回における食事バランスガイドの知見状況を世帯構成別にみたものを示した。「知っていて参考になっている」割合が最も高いのは「1 人暮らし」であり、家族が増えるにつれて低くなっている様子がうかがえ、「きいたこと、みたことがない」と「名前だけ聞いた、絵だけ見たことがある」の合計についても同様の傾向を示している。

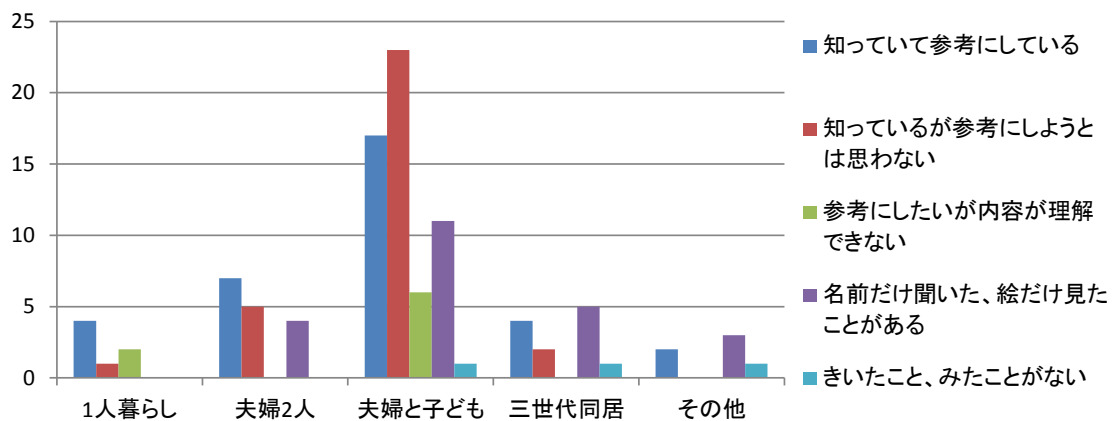


図 3-2-12 世帯構成別「食事バランスガイド」知見状況(第 2 回) 単位: 人

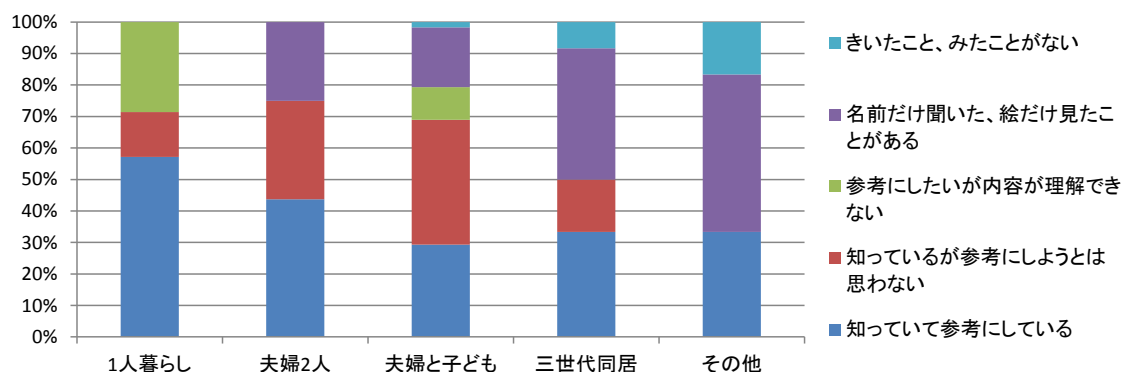


図 3-2-13 世帯構成別「食事バランスガイド」知見状況の割合 (第 2 回)

③ 事業効果について(「食事バランスガイド」の知見状況)

事業の一環としなされていたセミナーへの参加者 121 人に聴講の前後に知見状況を質問した。有効回答数 112 人のうち、Aの「知っている、参考にしている」回答者が 34 名から 57 名へと増し、増加率は 1.68 倍となった。当然のことながら、「ガイド」への消極的もしくは否定的な反応を示していたD、Eは 51 人から 30 人へと急減している。

表 3-2-3 セミナー聴講者の「食事バランスガイド」の知見状況の変化 (単位: 人)

「ガイド」の知見状況	聴講前	聴講後(増減率)
A: 知っている、参考にしている	34	57 (1.68)
B: 知っているが参考にしていない	19	16 (0.84)
C: 知っているが内容が理解できない	8	9 (0.89)
D: 名前だけを聞いた、絵だけ見た	32	17 (0.53)
E: 見聞きしたことがない	19	13 (0.68)
計	112	112 (100)

また、第 1 回と第 2 回の結果を年代別にみると(図 3-2-2・3-2-3、図 3-2-8・3-2-9)、「きいたこと、みたことがない」が大幅に減少し、全体的に「知っている、参考にしている」が増加していることがわかる。「知っているが参考にしようとは思わない」の割合も増加しているものの、全体としての知見状況が向上しているのは明らかである。世帯構成別にみると、とくに「1 人暮らし」において「知っている、参考にしている」が増加している。ただ、ふたたび就業別も併せてみると、「専業主婦・家事手伝い」および「夫婦と子ども」世帯における「知っているが参考にしようとは思わない」の割合が高いものとなっていることが注目される。

(3)－1 野菜類の摂取状況(摂取の有無)

日本における野菜類の供給量は1970会計年度の312.7g(1人1日あたり)をピークに減少傾向を辿り、2010年度には241.9gと推計されている(『食料需給表』による)。こうした傾向を背景にしたアンケートでは食生活の実態を把握する一助として、①前日に食した野菜類、②1日の平均的な皿数の実態と、③望ましい皿数を問うた。

有効回答数273人のうち257人(94.1%)は前日に野菜類を食しており、年代、世帯構成や就業状況を不問にして食している。これに対し、魚介類に関しては272人のうち174人(64.0%)が食し、野菜類に比してほぼ30ポイント低下している。このように、両者の隔たりは歴然としていた。野菜類は魚介類とは異なり、年代や世帯構成、就業状況を問わずに「すべての人々の日常的な食材」となっている。

表 3-3-1 前日の野菜類・魚介類摂取状況(第1回) 単位:人

食 材	食した	食しない	計
野菜類	257(94.1%)	16(5.9%)	273(100%)
魚介類	174(64.0%)	98(36.0%)	272(100%)

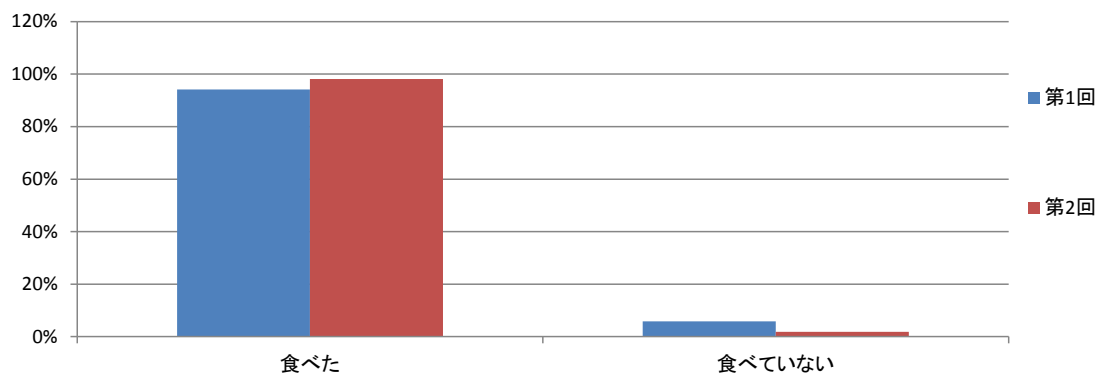


図 3-3-1 第1回および第2回アンケートにおける前日の野菜摂取の有無の割合

① 第1回目アンケートの結果(野菜類の摂取状況・摂取の有無)

図3-3-2から図3-3-7まで、前日の野菜摂取状況について、年代別・就業別・家族構成別にみたものを示した。表5および図3-3-1ですでに明らかなように、ほとんどが前日に野菜を摂取しているわけであるが、前述のようなカテゴリ別にみても、少数の「食べていない」とする者の偏りはみられず、本調査においては、とくに相違はうかがえなかった。

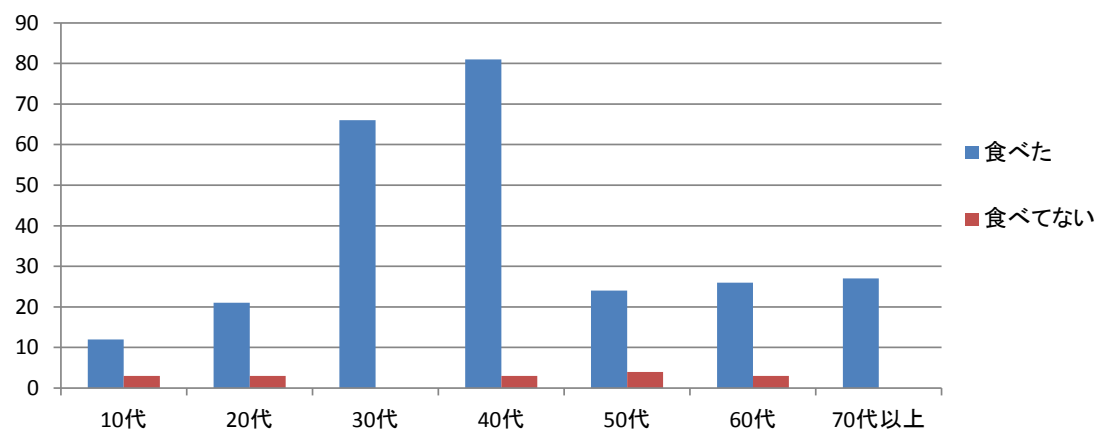


図 3-3-2 年代別の前日の野菜類摂取状況(第 1 回) 単位:人

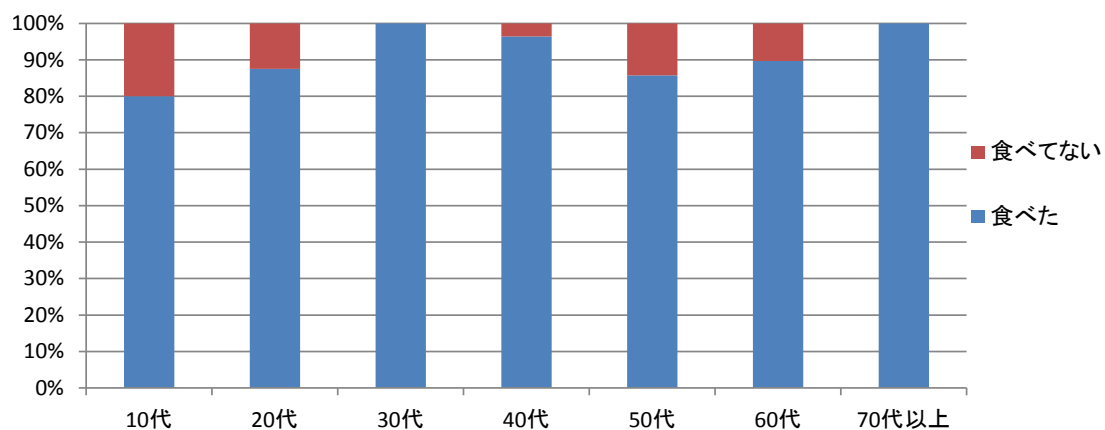


図 3-3-3 年代別の前日の野菜類摂取状況の割合(第 1 回)

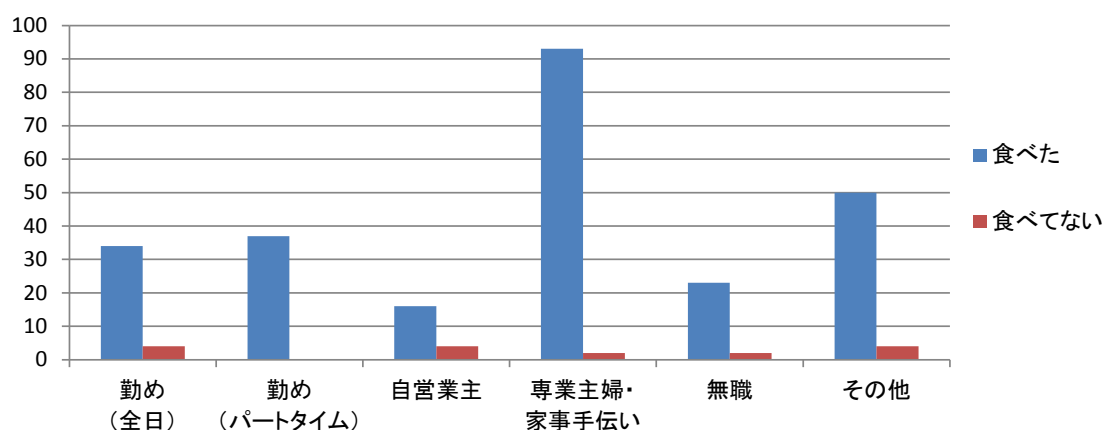


図 3-3-4 就業形態別の前日の野菜類摂取状況(第 1 回) 単位:人

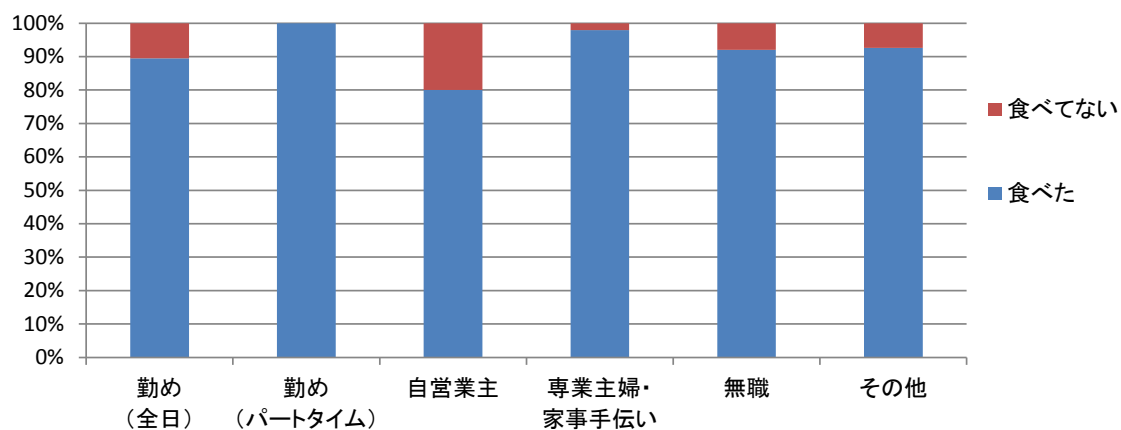


図 3-3-5 就業形態別の前日の野菜類摂取状況の割合(第1回)

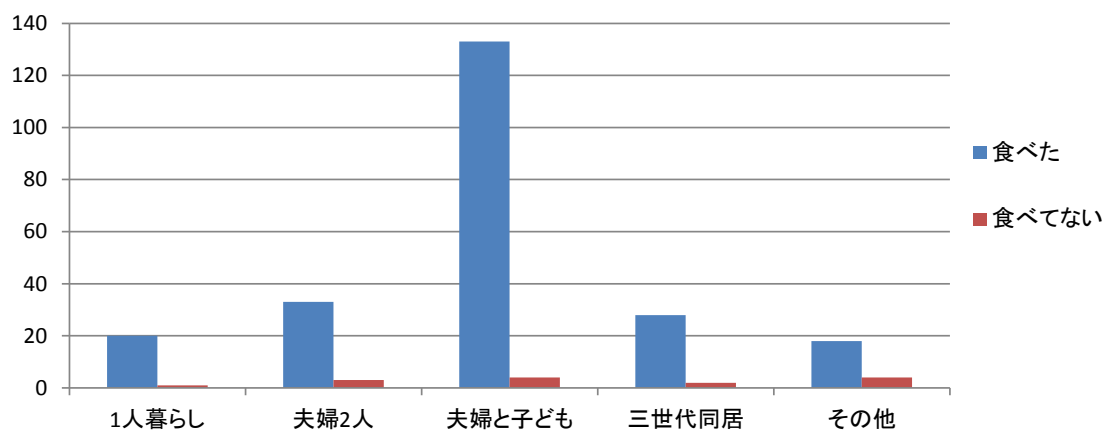


図 3-3-6 世帯構成別の前日の野菜類摂取状況(第1回) 単位:人

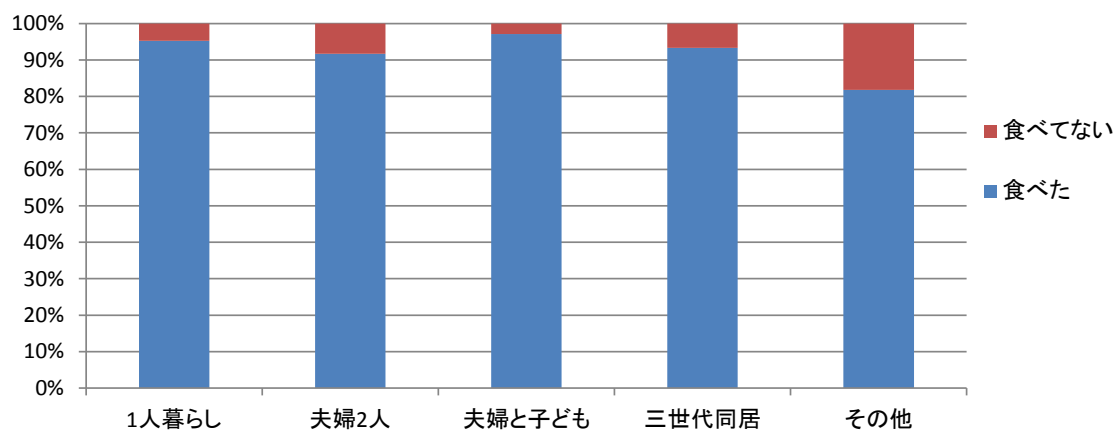


図 3-3-7 世帯構成別の前日の野菜類摂取状況の割合(第1回)

② 第2回目アンケートの結果(野菜類の摂取状況・摂取の有無)

図 3-3-8 から図 3-3-13 まで、前日の野菜摂取状況について、年代別・就業別・世帯構成別にみたものを示した。図 3-3-8 と図 3-3-9 で年代別にみると、「20 代」と「30 代」における「食べていない」とする割合が高いようである。図 3-3-10 と図 3-3-11 で就業別にみると、「勤め(パートタイム)」と「無職」に「食べていない」とする者が見られる。図 3-3-12 と図 3-3-13 で世帯構成別にみると、「夫婦と子ども」世帯において「食べていない」とする者がみられた。

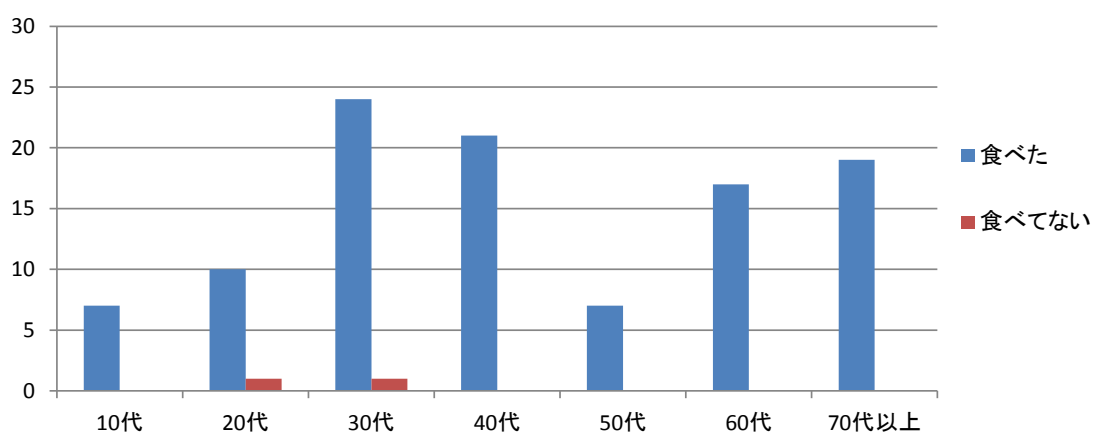


図 3-3-8 年代別の前日の野菜類取状況(第2回) 単位:人

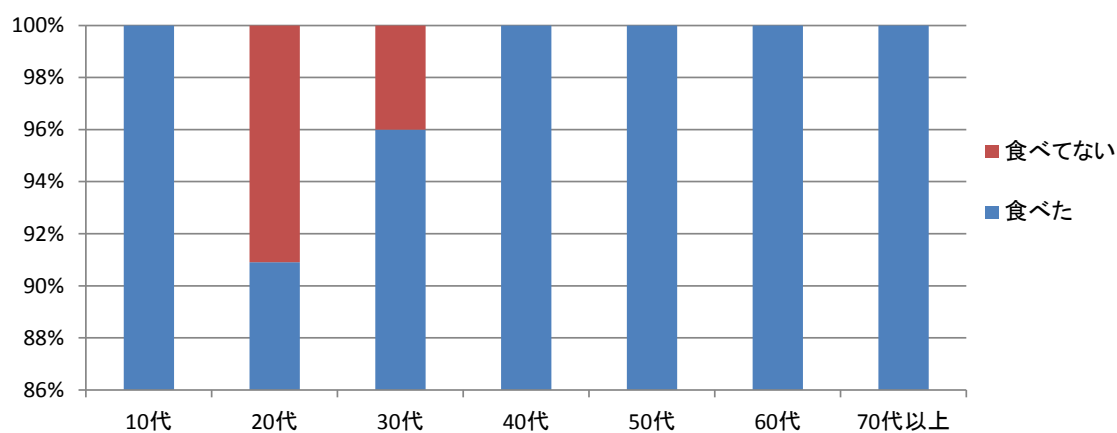


図 3-3-9 年代別の前日の野菜類摂取状況の割合(第2回)

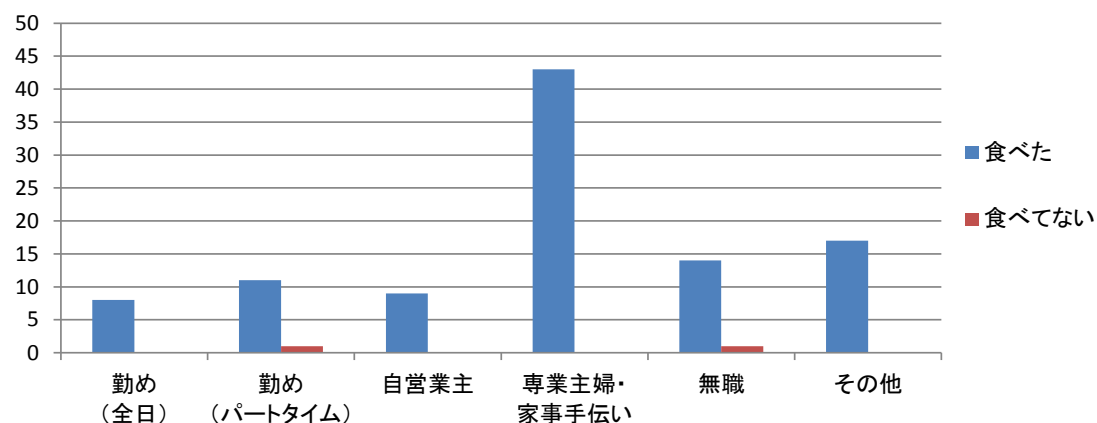


図 3-3-10 就業形態別の前日の野菜類摂取状況(第 2 回) 単位:人

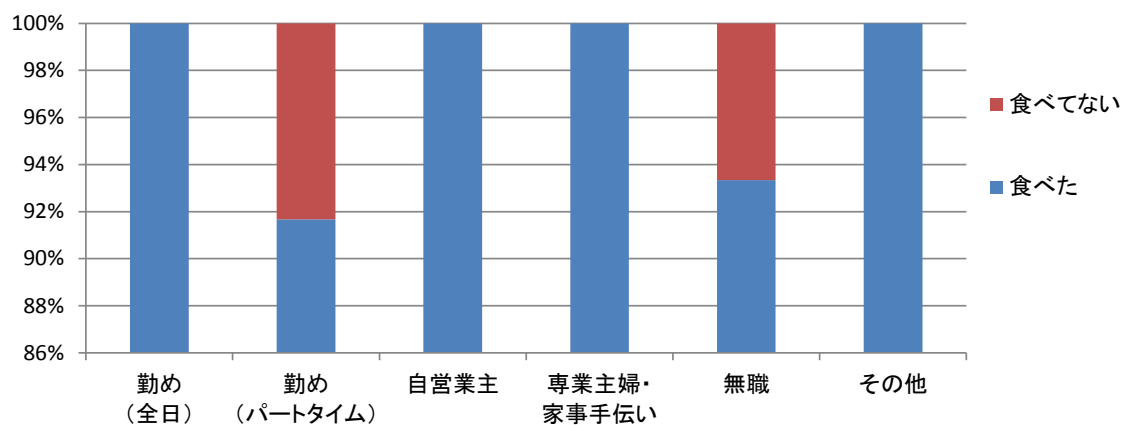


図 3-3-11 就業形態別の前日の野菜類摂取状況の割合(第 2 回)

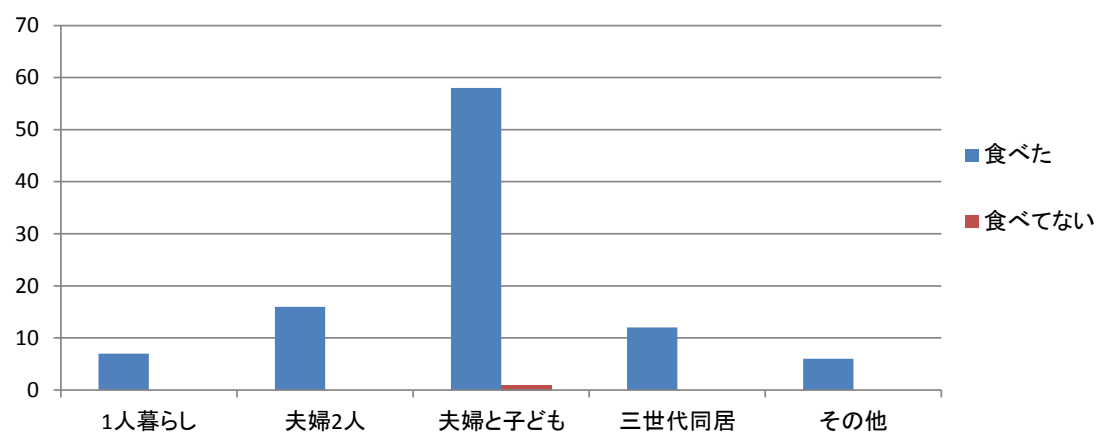


図 3-3-12 世帯構成別の前日の野菜類摂取状況(第 2 回) 単位:人

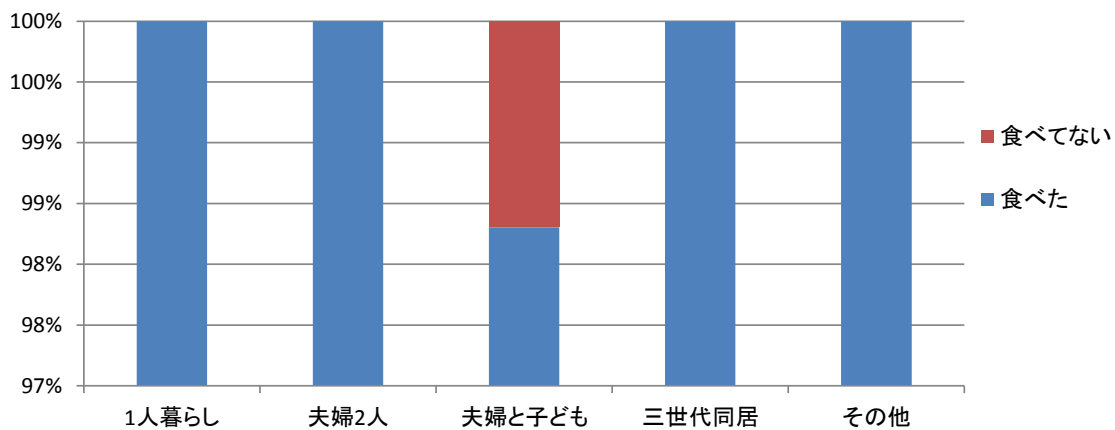


図 3-3-13 世帯構成別の前日の野菜類摂取状況の割合(第2回)

(3)－2 野菜類の摂取状況(摂取量)

①第1回目アンケートの結果(野菜類の摂取状況・摂取量)

図 3-3-14 と図 3-3-15 に、1 日における野菜摂取量について、年代別にみたものを示した。すべての年代において、1～2 皿くらいが多くを占めている。とくに 30 代における野菜摂取量が多いことが注目される。

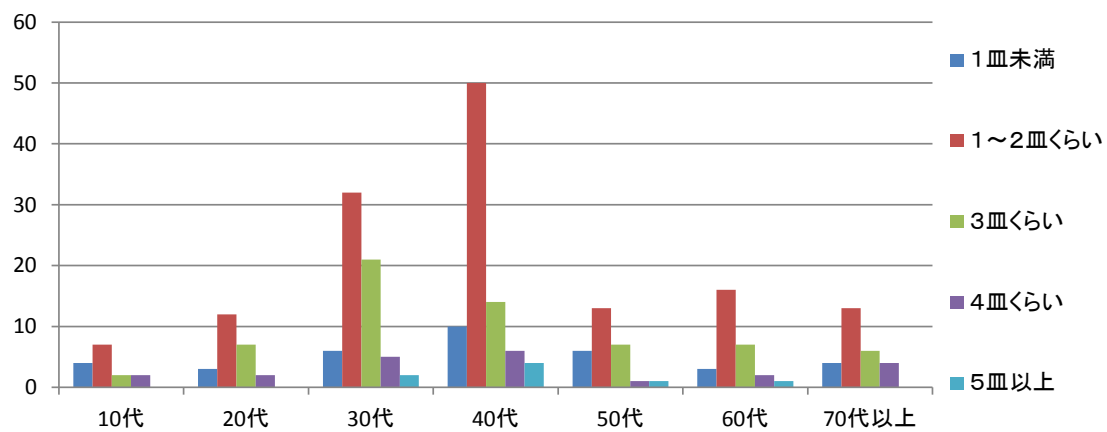


図 3-3-14 年代別野菜類摂取量の現況(第1回) 単位:人

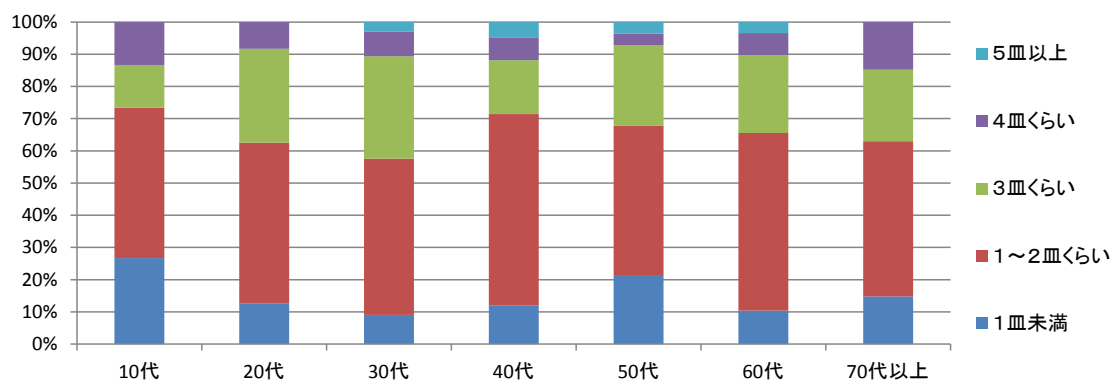


図 3-3-15 年代別野菜類摂取量の割合(第 1 回)

図 3-3-16 と図 3-3-17 に、1 日における野菜摂取量について、就業別にみたものを示した。「自営業主」および「専業主婦・家事手伝い」について、摂取量が多いことが確認できる。また、「勤め全日」においては、「1 皿未満」の割合が相対的に高いが、「5 皿以上」についても多く見られる。

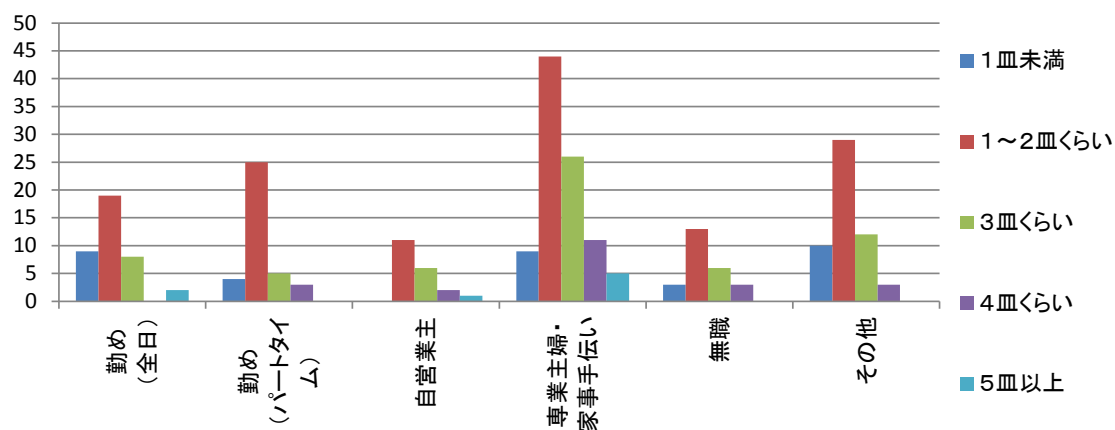


図 3-3-16 就業別野菜類の摂取量の現況(第 1 回) 単位:人

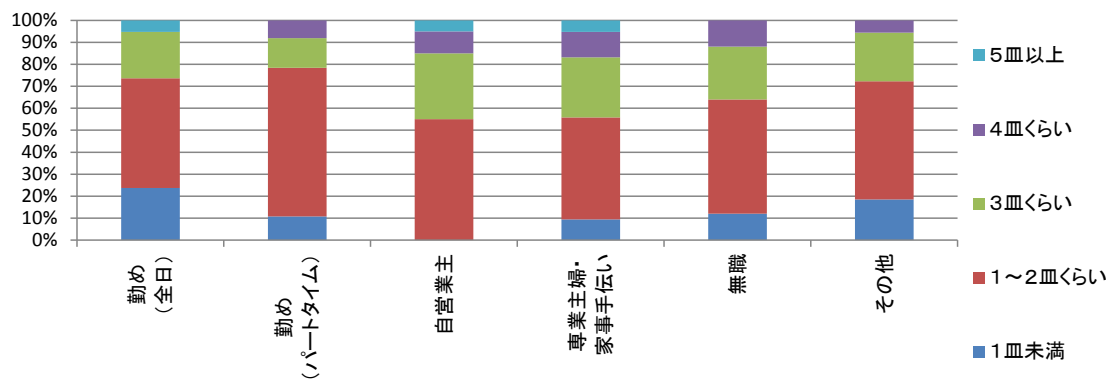


図 3-3-17 就業別野菜類の摂取量の割合(第 1 回)

図 3-3-18 と図 3-3-19 に、1 日における野菜摂取量について、世帯構成別にみたものを示した。「5 皿以上」がみられるのが、「1 人暮らし」「夫婦と子ども」「その他」となっており、「三世代同居」が「2 皿以下」の割合が最も高い世帯構成となっていることが注目される。

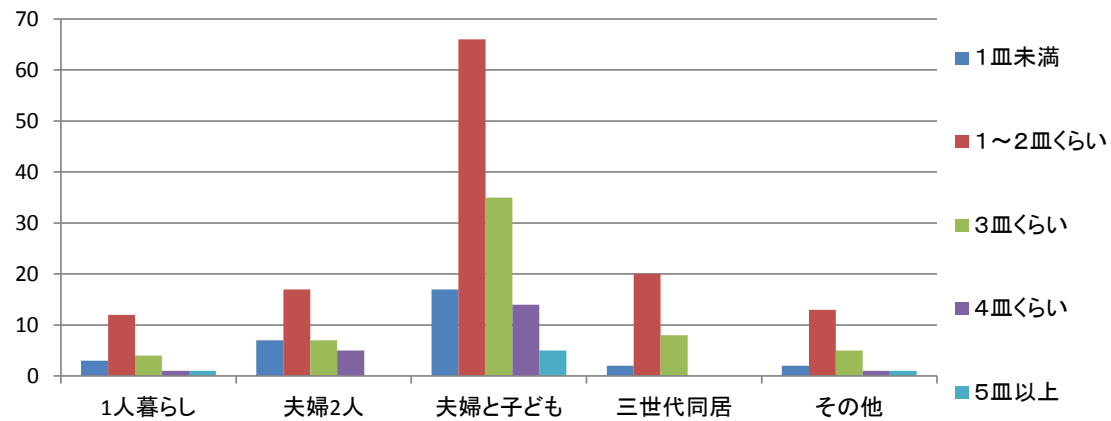


図 3-3-18 世帯構成別野菜類の摂取量の現況(第 1 回) 単位: 人

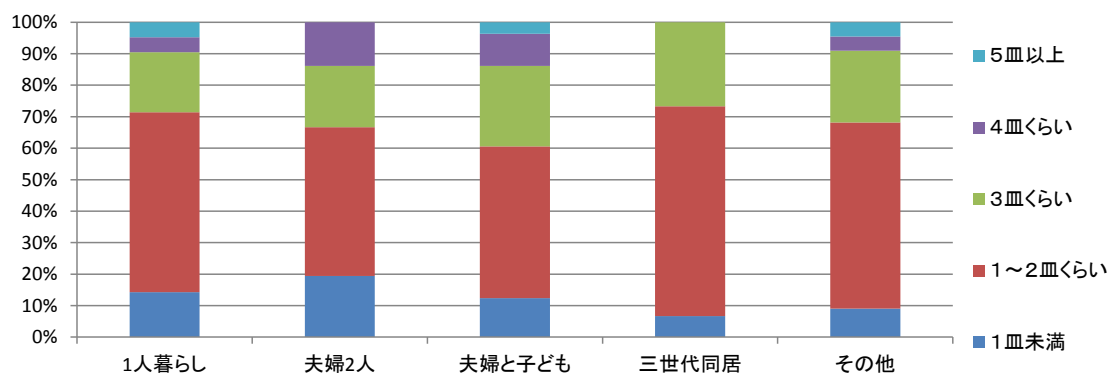


図 3-3-19 世帯構成別野菜類の摂取量の割合(第 1 回)

②第2回目アンケートの結果(野菜類の摂取状況・摂取量)

図 3-3-20 と図 3-3-21 に、第 2 回目アンケートにおける、1 日の野菜摂取量について、年代別にみたものを示した。すべての年代において「5 皿以上」がみられ、30 代にいたっては、50%を超えている。また、4 皿以上となると 20 代が多く、80%以上となっている。

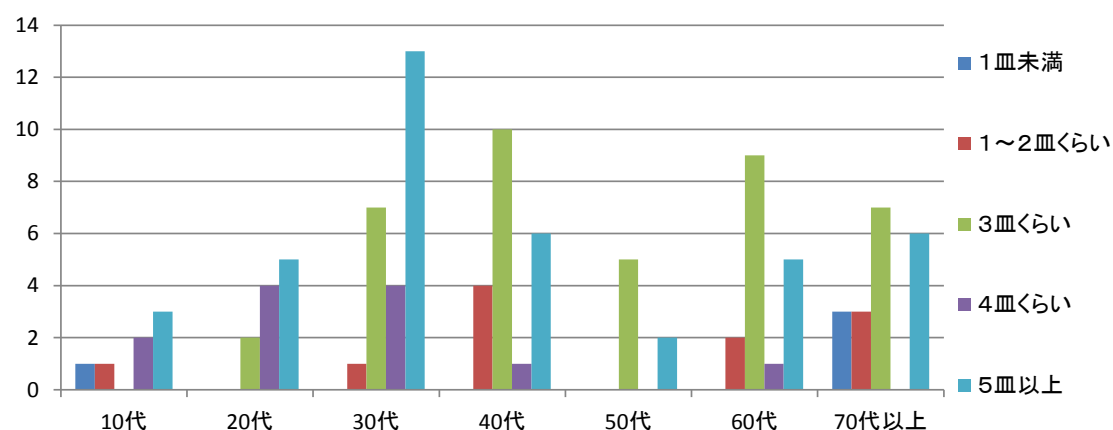


図 3-3-20 年代別野菜類の摂取量の現況(第2回) 単位:人

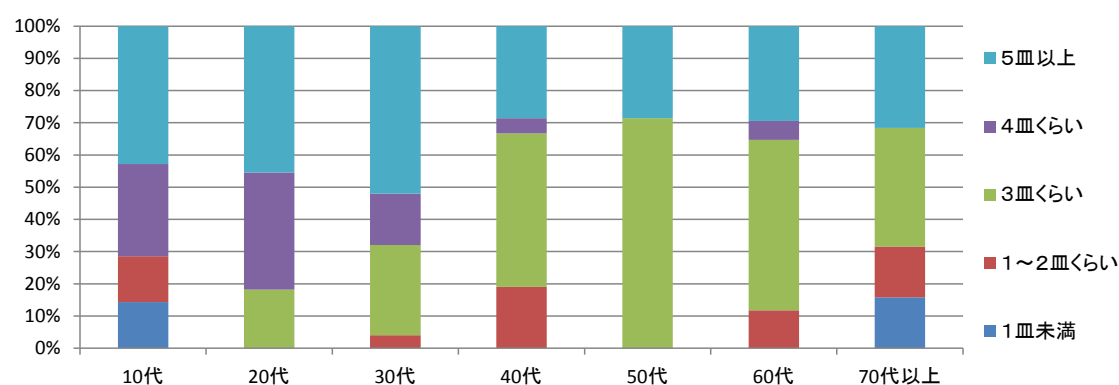


図 3-3-21 年代別野菜類の摂取量の割合(第2回)

図 3-3-22 と図 3-3-23 に、1 日における野菜摂取量について、就業別にみたものを示した。「勤め(全日)」と「無職」においては、幅広い分布となっているが、「勤め(パートタイム)」や「自営業主」と比較すると、相対的に多く摂取している割合が高くなっている。

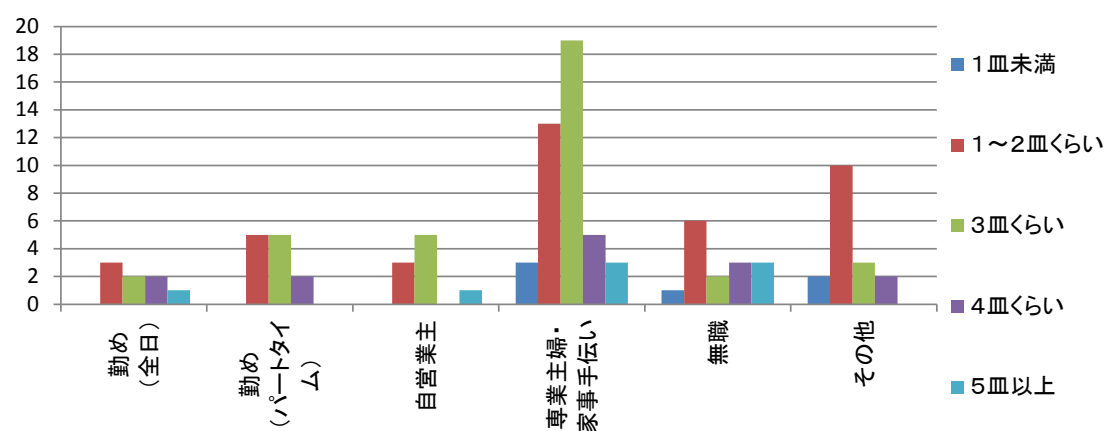


図 3-3-22 就業別野菜類の摂取量の現況(第2回) 単位:人

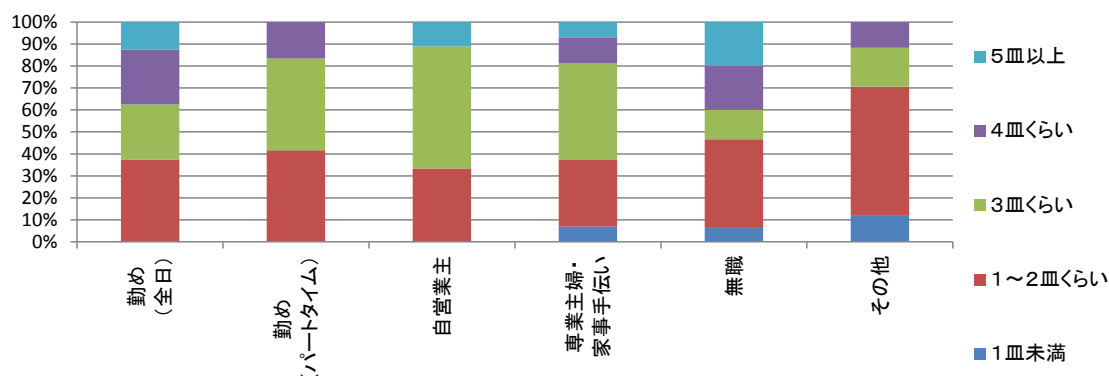


図 3-3-23 就業別野菜類の摂取量の割合(第 2 回)

図 3-3-24 と図 3-3-25 に、1 日における野菜摂取量について、世帯構成別にみたものを示した。「1 人暮らし」は「5 皿以上」と「1～2 皿くらい」に二分されているが、「夫婦 2 人」「夫婦と子ども」と人数が多くなるにつれて、野菜の摂取する量が多くなっている傾向がみてとれる。

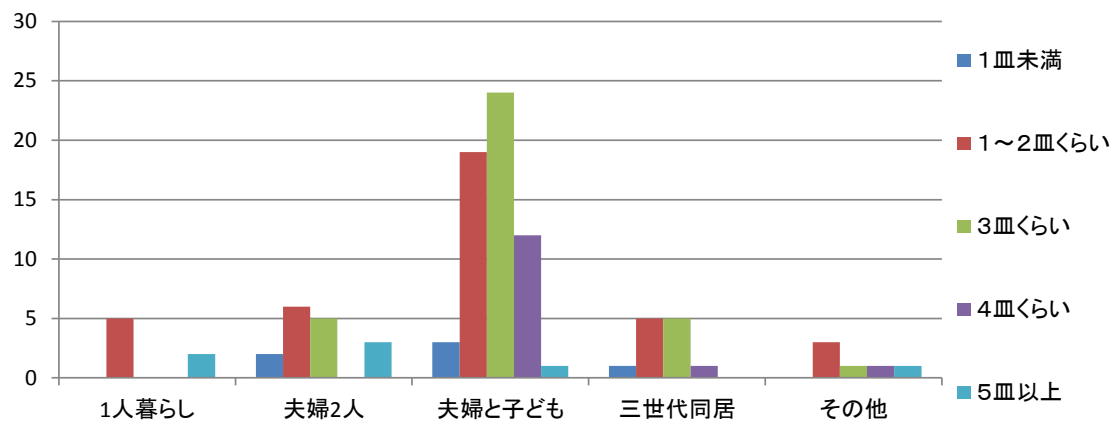


図 3-3-24 世帯構成別野菜類の摂取量の現況(第 2 回) 単位:人

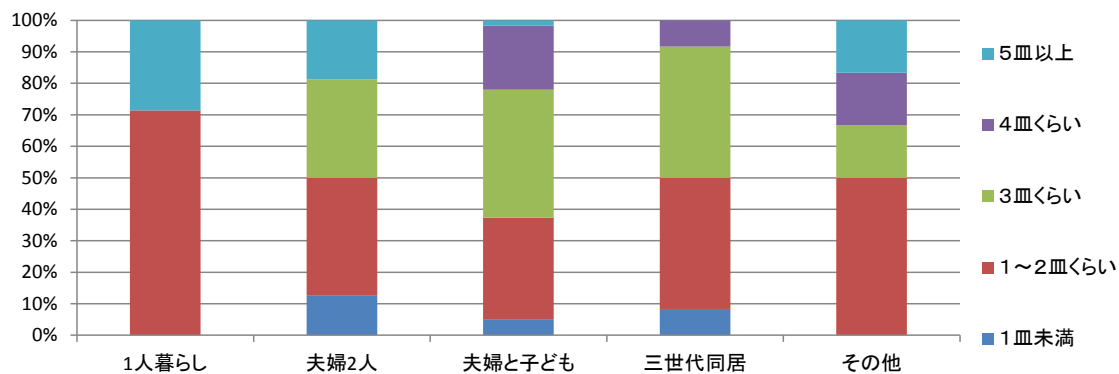


図 3-3-25 世帯構成別野菜類の摂取量の割合(第 1 回)

③ 事業効果について(野菜類の摂取状況・摂取量)

図 3-3-26 に、1 日における野菜摂取量についての第 1 回および第 2 回アンケートにおける結果を示した。「1 皿未満」および「1～2 皿くらい」とする割合が減少している一方、「3 皿くらい」以上はすべて増加していることが如実に見て取れる。

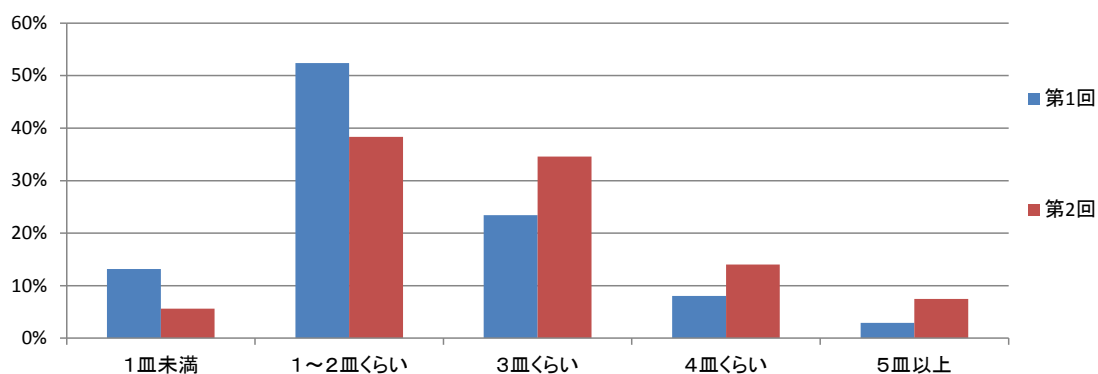


図 3-3-26 第 1 および第 2 回アンケートにおける野菜摂取量の割合

(3)－3 野菜類の摂取状況(望ましい摂取量)

今回のアンケートでは「ひとにぎりの野菜を一皿」としており、摂取量を皿数に換算している。現況では平均して 2.4 皿に過ぎず、理想とされる「5 皿以上」にほど遠い皿数となっている。これは年代、世帯構成や就業状況に関係なく、理想値からは低レベルの摂取状況である。こうした現況を振り返るために、「望ましい野菜類の皿数」を問いかけた。

現況より多い皿数を望ましいと回答したのは 160 人を数え、現況維持が 80 人、皿数を減らすことを望む回答が 25 人となる。これまで 3 皿以上を食していた回答者は現況を維持する傾向を示し、3 皿未満が皿数の増加を望ましいと答えている。

このように「望ましい」とされてきた 5 皿以上を摂取していたのは 8 人に過ぎなかったが、「5 皿以上」を指摘する回答者が 45 人を数えるようになった。

表 3-3-1 第 1 回アンケートにおける野菜類の摂取現況と望ましい皿数 単位: 人

	望ましい皿数							平均皿数
	皿数	1皿	2皿	3皿	4皿	5皿<	計	
現 況	1皿	8	10	16	0	2	36	2. 11
	2皿	11	37	59	17	13	147	2. 89
	3皿	0	6	28	17	14	65	3. 34
	4皿	0	0	7	3	12	22	4. 23
	5皿<	0	0	3	1	4	8	4. 14
	計	19	53	123	38	45	278	3. 04

①第1回目アンケートの結果(野菜類の摂取状況・望ましい摂取量)

図 3-3-27 と図 3-3-28 に、1 日における望ましい野菜摂取量について、年代別にみたものを示した。ここでは、「10 代」から「60 代」まで、年齢構成が上がるにつれて、望ましいとされる皿数が減少している傾向がみえる。若年層の方が野菜摂取への意向が強いことは興味深い結果といえよう。

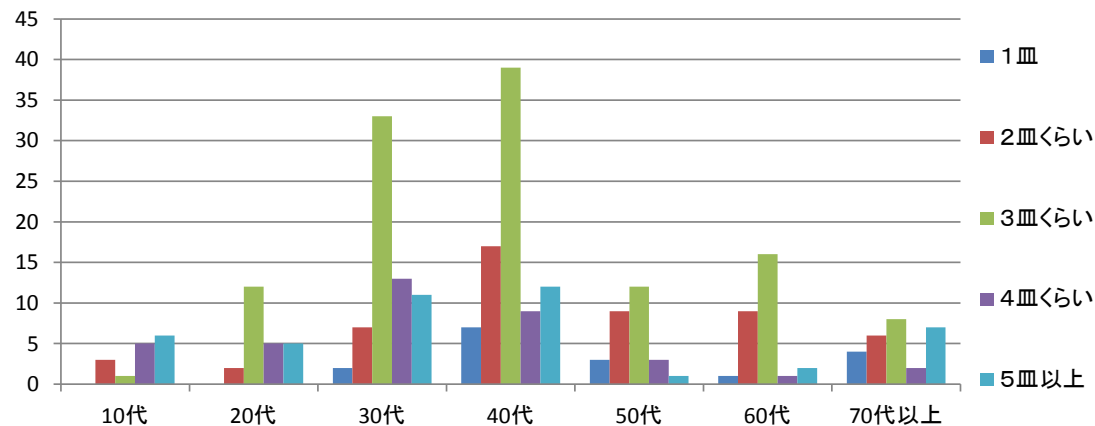


図 3-3-27 年代別の望ましい野菜類の皿数(第 1 回) 単位:人

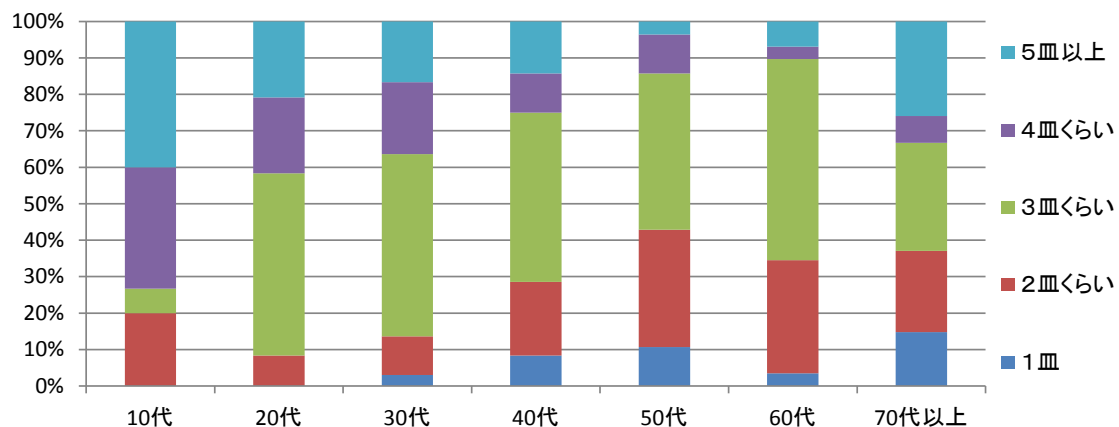


図 3-3-28 年代別の望ましい野菜類の皿数の割合(第 1 回)

図 3-3-29 と図 3-3-30 に、1 日における望ましい野菜摂取量について、職業別にみたものを示した。「勤め(全日)」や「自営業主」においては、約 80%が「3 皿以下」が望ましいという意向を有している。一方で、「無職」においてはより多い摂取量を望ましいとする意向となっている。

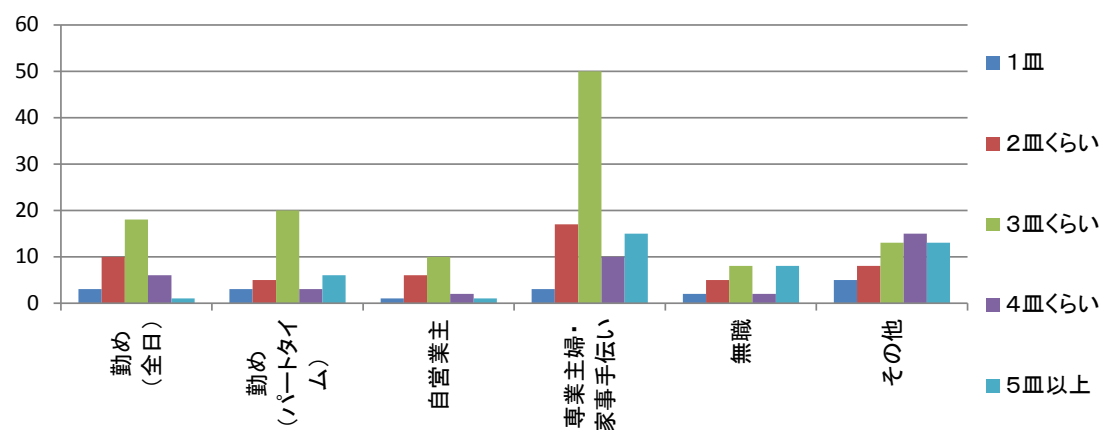


図 3-3-29 職業別の望ましい野菜類の皿数(第1回) 単位:人

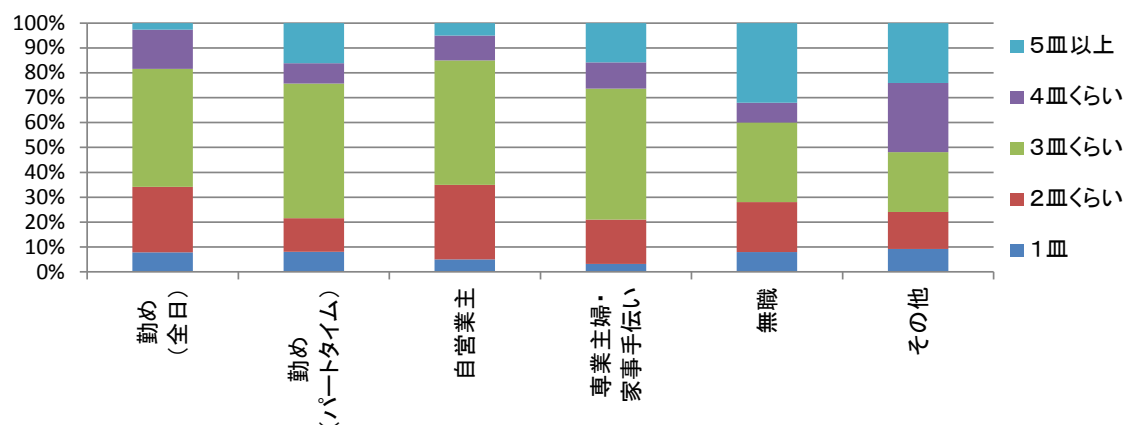


図 3-3-30 職業別の望ましい野菜類の皿数の割合(第1回)

図 3-3-31 と図 3-3-32 に、1 日における望ましい野菜摂取量について、世帯構成別にみたものを示した。「4 皿以上」を望ましいとする割合について、「夫婦と子ども」世帯が最も多くなっている。

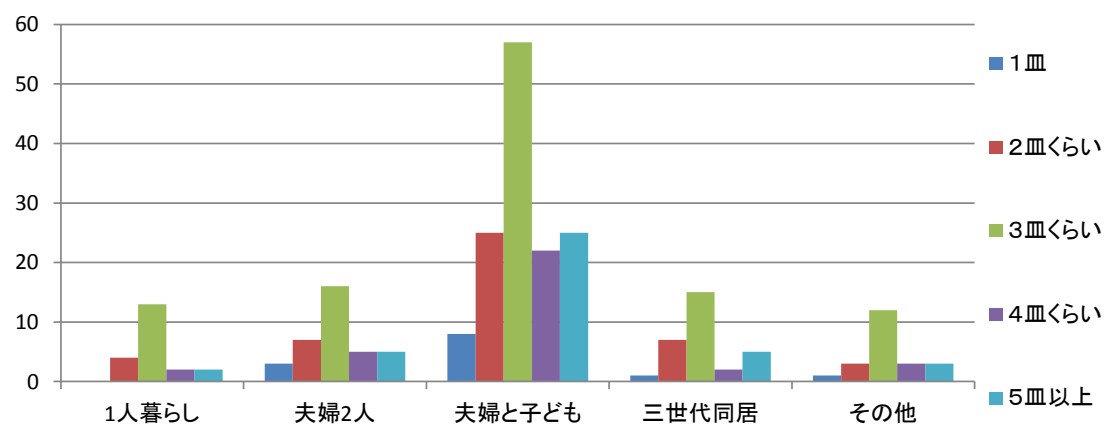


図 3-3-31 世帯構成別の望ましい野菜類の皿数 (第1回) 単位:人

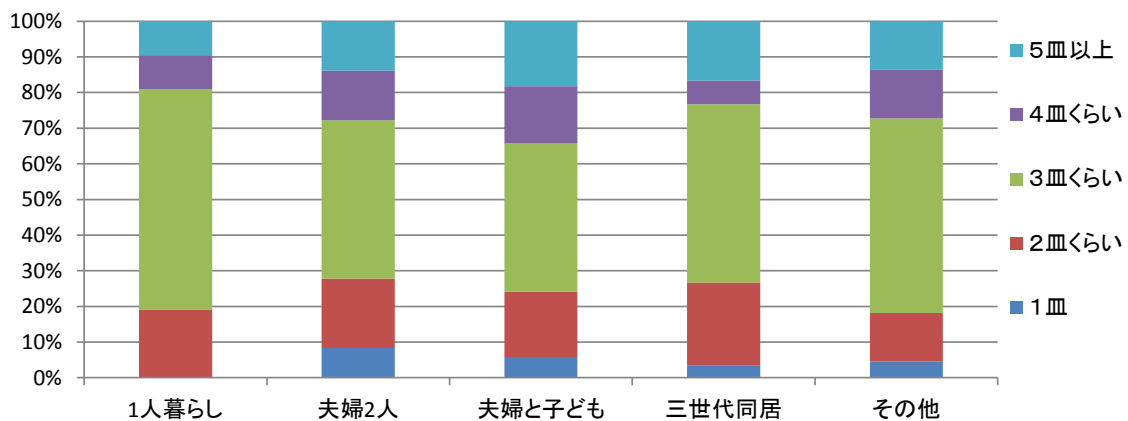


図 3-3-32 世帯構成別の望ましい野菜類の皿数の割合（第1回）

②第2回目アンケートの結果(野菜類の摂取状況・望ましい摂取量)

図 3-3-33 と図 3-3-34 に、第2回目アンケートにおける1日の望ましい野菜摂取量について、年代別にみたものを示した。ここでは、10代から30代までの「5皿以上」の割合が同程度であり、40代から60代までのそれが同程度、という傾向がみられる。ただ、10代では「1皿」や「2皿くらい」もある。

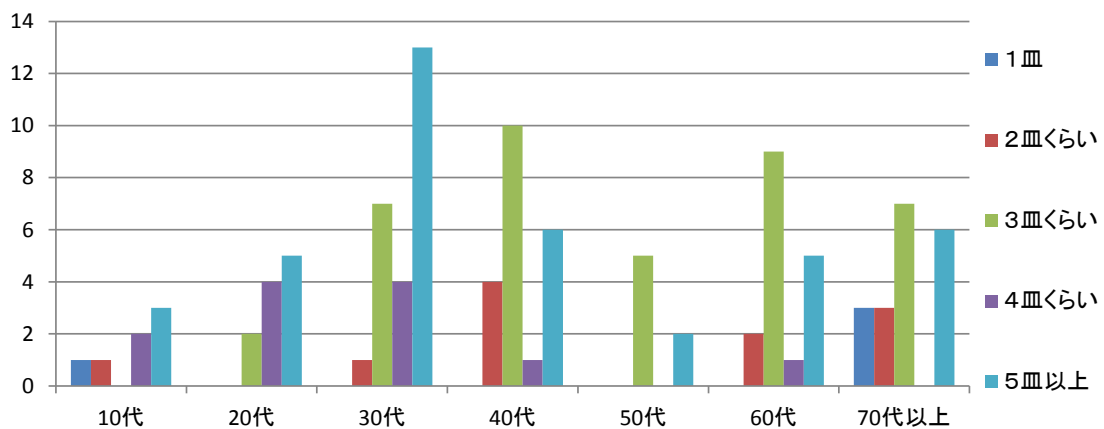


図 3-3-33 年代別の望ましい野菜類の皿数(第2回) 単位:人

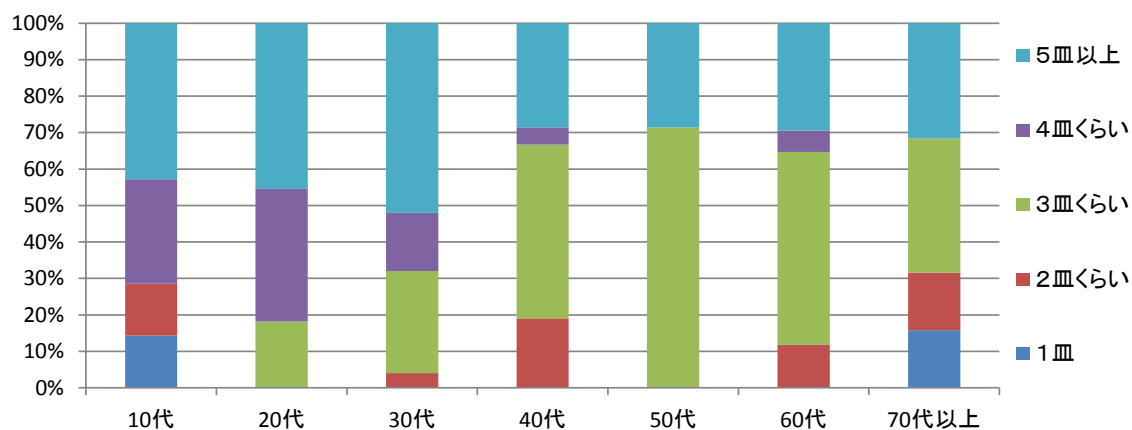


図 3-3-34 年代別の望ましい野菜類の皿数の割合(第 2 回)

図 3-3-35 と図 3-3-36 に、第 2 回目アンケートにおける 1 日の望ましい野菜摂取量について、職業別にみたものを示した。すべての階層において、概ね 30～40%の割合で「5 皿以上」が望ましいとしている。

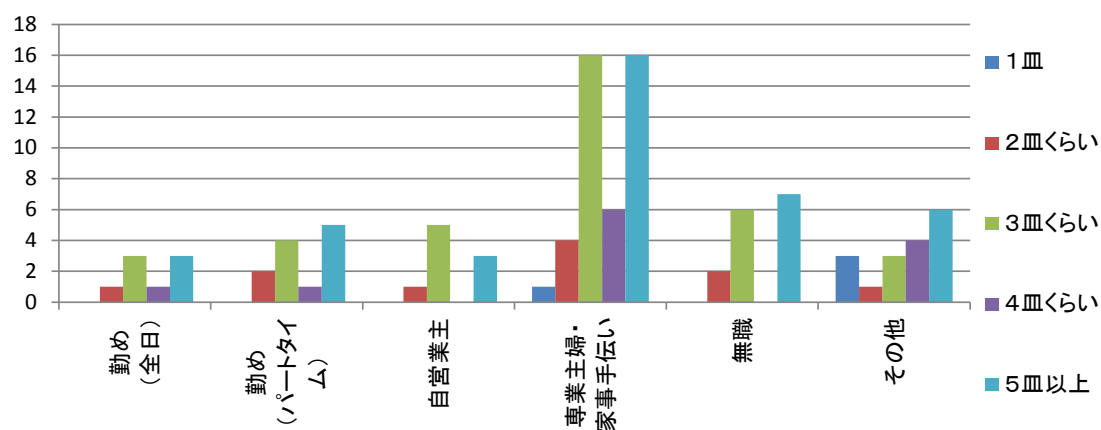


図 3-3-35 職業別の望ましい野菜類の皿数(第 2 回) 単位:人

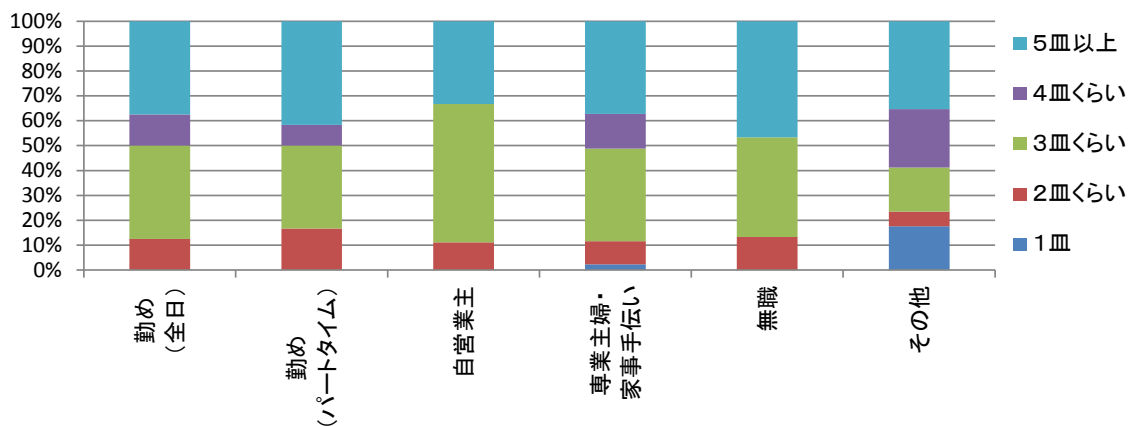


図 3-3-36 職業別の望ましい野菜類の皿数の割合(第 2 回)

図 3-3-37 と図 3-3-38 に、第 2 回目アンケートにおける 1 日の望ましい野菜摂取量について、世帯構成別にみたものを示した。「5 皿以上」については、「1 人暮らし」と「夫婦と子ども」においては、50%程度がとなっているが、「夫婦二人」はもっとも低く、20%程度である。

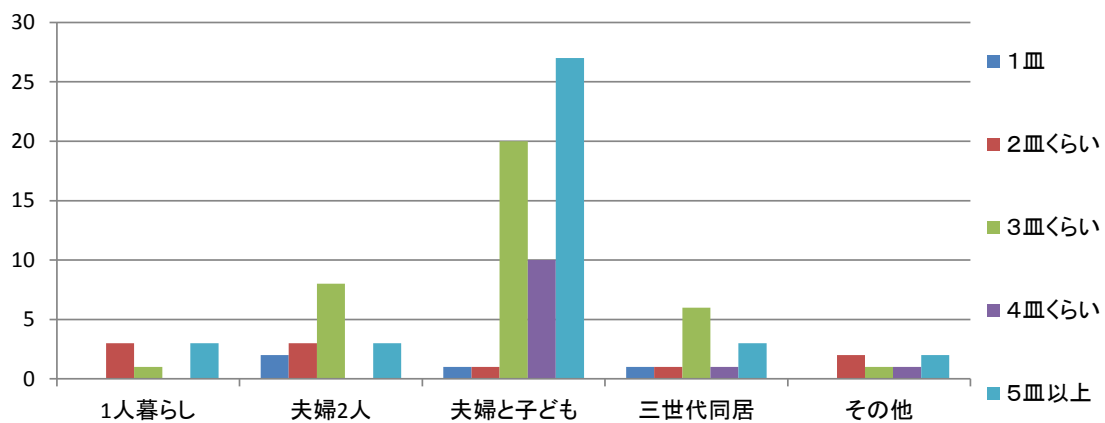


図 3-3-37 世帯構成別の望ましい野菜類の皿数(第 2 回) 単位: 人

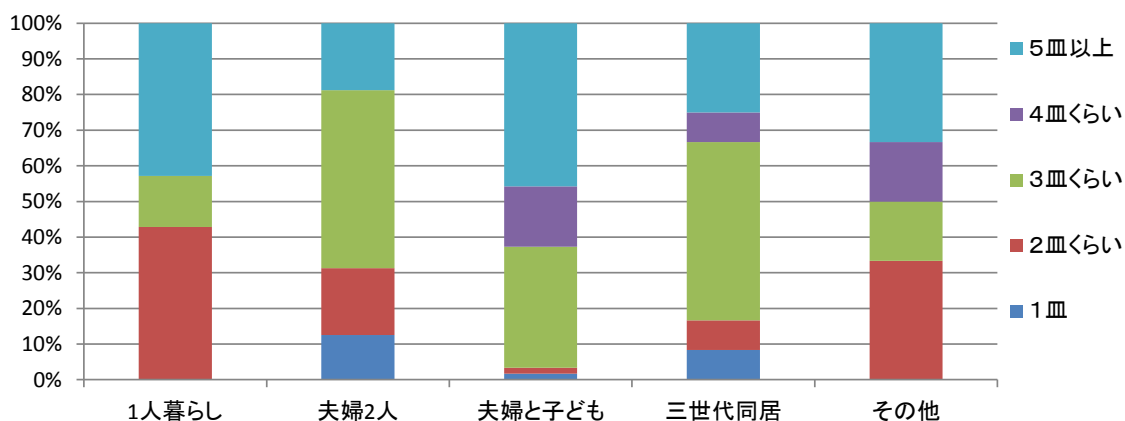


図 3-3-38 世帯構成別の望ましい野菜類の皿数の割合 (第2回)

② 事業効果について(望ましい摂取量)

前項と同様にセミナー参加者へ講演の前後の「望ましい皿数」を照会した。講演前には2皿以下と回答していた30人が半数の15人となり、4皿以上としていた42人が2倍の84人を数える結果となった。情報提供の果たす役割を確認させる数値となっている。

表3-3-2 第2回アンケートにおける望ましい野菜類の皿数の変化 単位:人

野菜類の望ましい皿数	聴講前	聴講後(増減率)
1皿	5	4 (0.80)
2皿	25	11 (0.44)
3皿	44	16 (0.36)
4皿	18	4 (0.22)
5皿以上	24	80 (3.33)
計	111	111 (1.00)

図 3-3-39 に示したのは、望ましい野菜摂取量について、第1回目と第2回目アンケートの結果を比較したものである。「1皿未満」と「1～2皿くらい」の割合が低下する一方で、「3皿くらい」以上についてはすべてが増加していることが如実にみとれる。

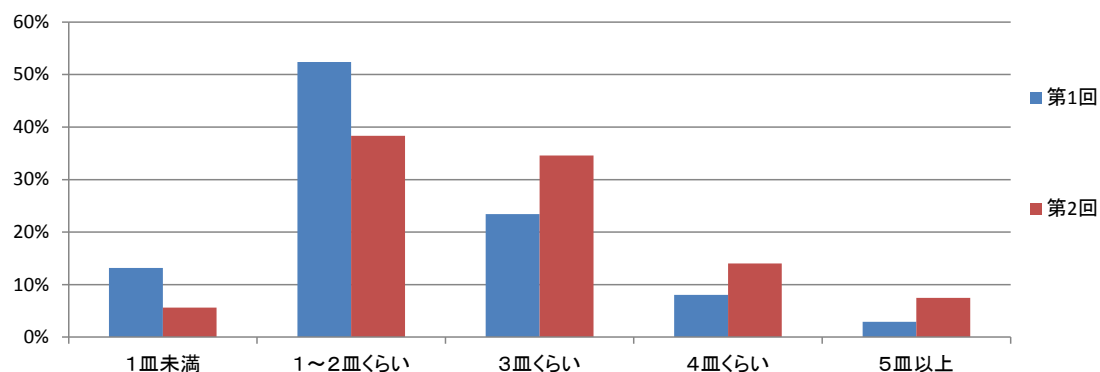


図 3-3-39 第 1 回および第 2 回アンケートにおける望ましい野菜摂取量の割合

(4) 魚介類の摂取状況

① 第1回目アンケート結果

日本における漁獲高は 1980 年代から減少傾向を続け、2010 年度には 1990 年度の 1/2 以下となっている。輸入量は微増しているが、市場供給量は 2000 年の 259g((1 人 1 日あたり))に比して、2010 年には 81.2g まで低下していると推定されている。国民の「魚離れ」が進行しているが、このアンケートにおいても、前述したように、前日に魚介類を食したのは、272 人中 174 人であり、60% 余に過ぎなかった (図 3-4-1)。

しかも、野菜類とは異なり、年代による差異が顕著に現れ、40 歳代以下では「食した」「食しない」がほぼ半数であった (表 3-4-1)。これに対して 50 歳代以上では高齢者の「食した」割合が高くなっている。

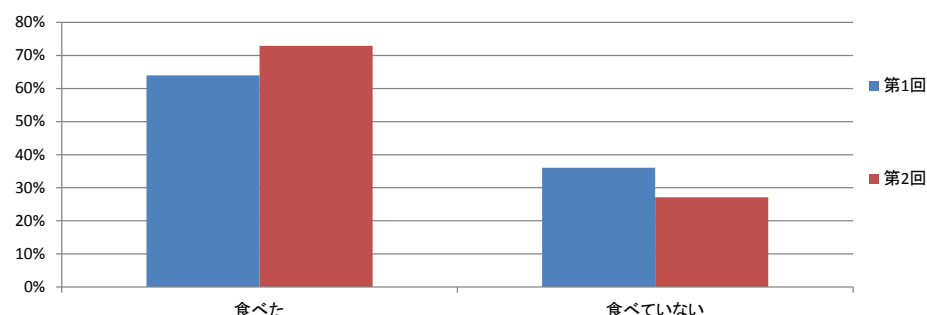


図 3-4-1 第 1 回および第 2 回アンケートにおける魚介類摂取の有無の割合

「魚介類を日常的に食しているか」と 1 週間当たりの魚介類の摂取回数を問うた。週に 4 回以上と回答したのは 57 人であり、ほぼ 5 人にひとりという状況である (表 3-4-2)。全体として、平均的な魚介類の食事回数は週 3 回を下回るが、50 歳代以上では 3 回以上となる。この 50 歳代以上の 82 人のうち週 4 回以上の摂取者は 39 人を数え、ほぼ二人に一人は週の半分以上は魚介類を食していると答えている。

表 3-4-1 年代別魚介類摂取頻度(1 週間当たり) 単位:人

年代	1回	2回	3回	4回	5回<	計	平均回数
10 歳代	1	5	4	5		15	2. 9
20 歳代	3	10	7	3	1	24	2. 8
30 歳代	4	31	18	10	3	66	2. 7
40 歳代	4	37	26	10	7	84	2. 7
50 歳代	1	5	11	8	3	28	3. 4
60 歳代	2	2	8	13	4	29	3. 5
70 歳<		6	8	6	5	25	3. 4
計	15	96	82	55	23	273	2. 9

魚介類の摂取頻度への職業別による影響をみると、「無職」、「自営業種」、「その他」層による摂取頻度が相対的に高くなっていることが伺える(図 3-4-2)。

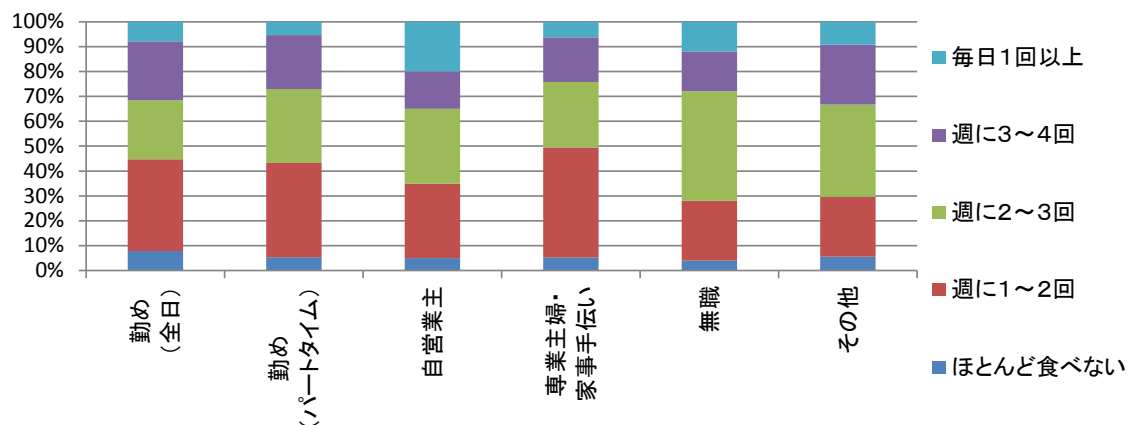


図 3-4-2 職業別魚介類摂取頻度の割合(1 週間当たり)(第 1 回)

表 3-4-2 年代別前日に魚介類の摂取の有無 単位:人

年代	食した	食しない	計
10 歳代	7	8	15
20 歳代	13	11	24
30 歳代	37	29	66
40 歳代	47	37	84
50 歳代	23	5	28
60 歳代	22	6	28
70 歳<	25	2	27
計	174	98	273

他方、世帯構成による影響をみると、「夫婦二人」および「三世帯同居」世帯の摂取頻度が相対的に高くなっている(図 3-4-3)。また、「一人暮らし」層においては、毎日ためているものと、ほとんど食べないものが拮抗し、両極化していることが伺える。世帯構成のあり方が、魚食消費に一定の影響を及ぼしているようである。

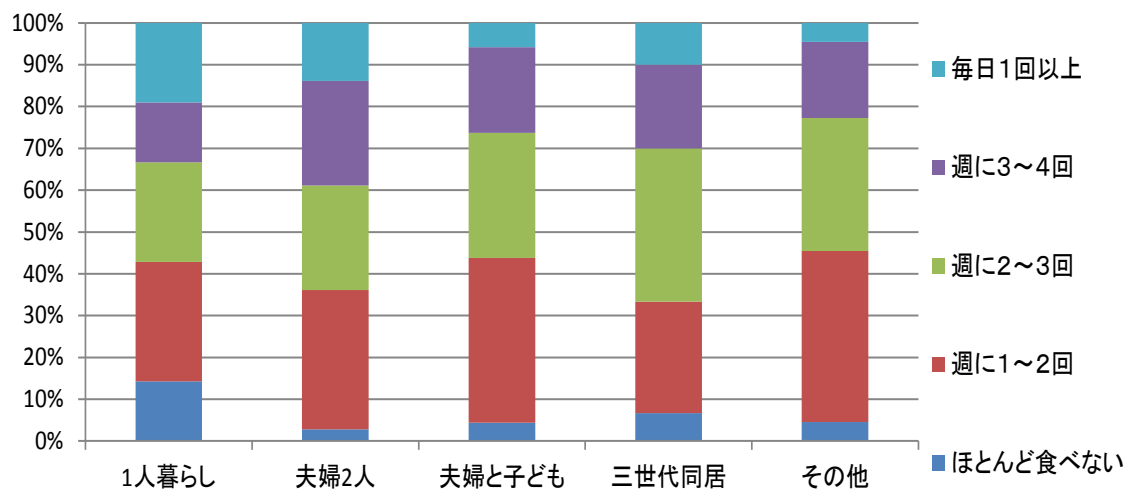


図 3-4-3 世帯構成別魚介類摂取頻度の割合(1週間当たり)(第1回)

② 第2回アンケートの結果

前日に魚を食べた層が70%を超えている(前出図3-4-1)。

年代別構成をみると、図3-4-4が示すように、全体的に40歳代までの若い世代は摂取頻度が低く、40歳代が最低となっている。しかし、50歳代になると、年代が上がるにつれて、摂取頻度が高くなり、70代以上になると、ほとんどが週2~3回以上の消費をしている。

魚の消費においては、かつては年が取るにつれて魚の消費量が増加するという「加齢現象」があり、いまではその「加齢現象」が消滅しつつあるといわれているが、今回のこのアンケートでみた限り、「加齢現象」はまだ健在しているように思われる。

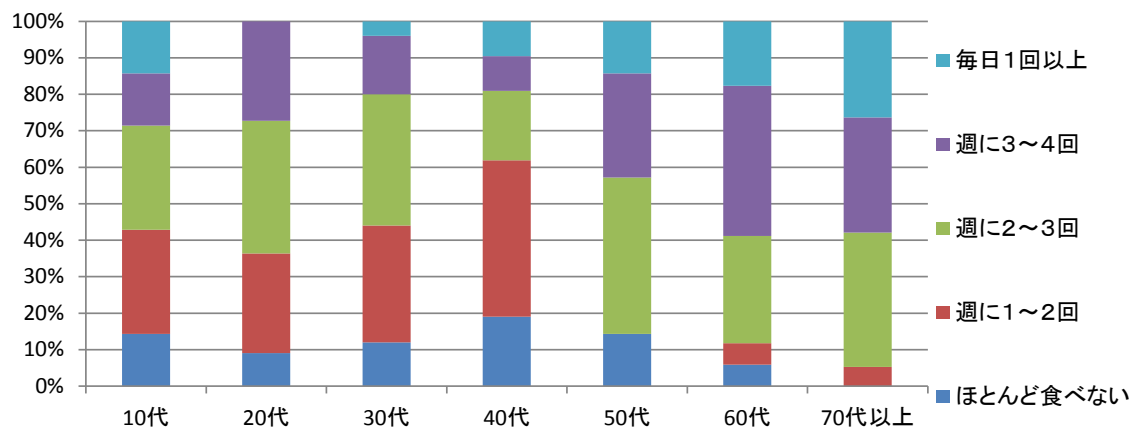


図3-4-4 年代別魚介類摂取頻度の割合(1週間当たり)(第2回)

職業別による影響をみると、パートタイムと専業主婦・家事手伝いによる消費頻度が若干低くなっていることがわかる(図3-4-5)

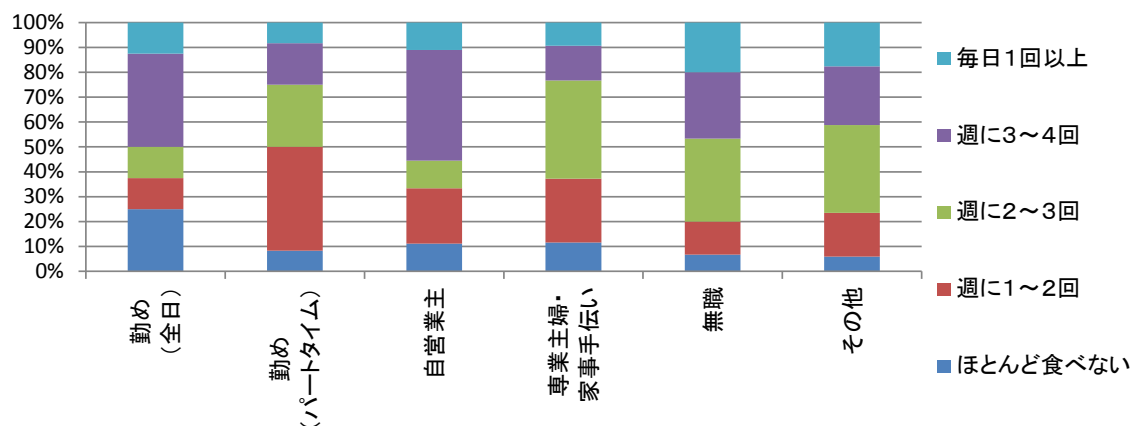


図3-4-5 職業別魚介類摂取頻度の割合(1週間当たり)(第2回)

「夫婦 2 人」世帯の摂取頻度が高く、「1 人暮らし」の摂取頻度が相対的に低くなっていることが伺える(図 3-4-6)

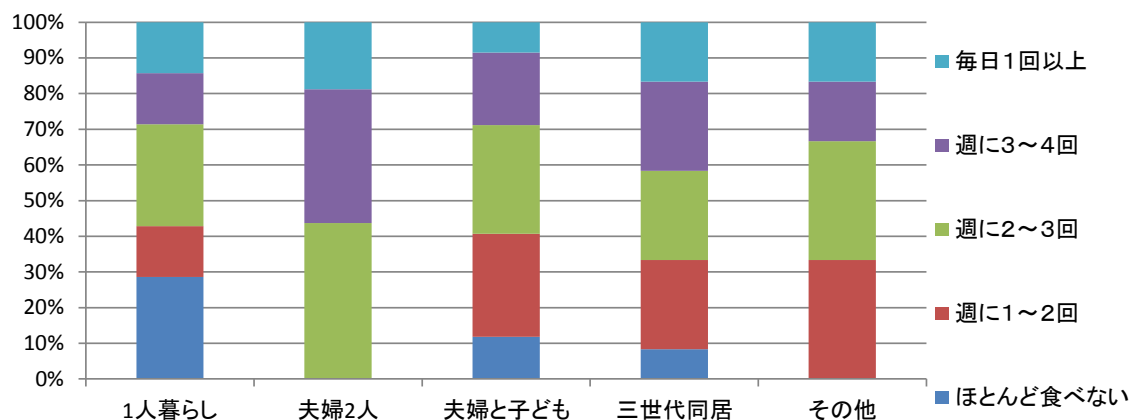


図 3-4-6 世帯構成別魚介類摂取頻度の割合(1 週間当たり)(第 2 回)

③ 効果評価

事業実施を通じて、魚の摂取頻度は高くなっている。例えば、前出図 3-4-1 が示すように、回答者の中には先日「魚を食べた」という層が 1 割近く増えており、また一週間における魚の摂取頻度も一回目の結果よりは高くなってきている(図 3-4-7)。つまり、「週に 1~2 回」と答えた割合が減り、逆に「週に 2~3 回」以上の回答が各層において増えていることが分かった。

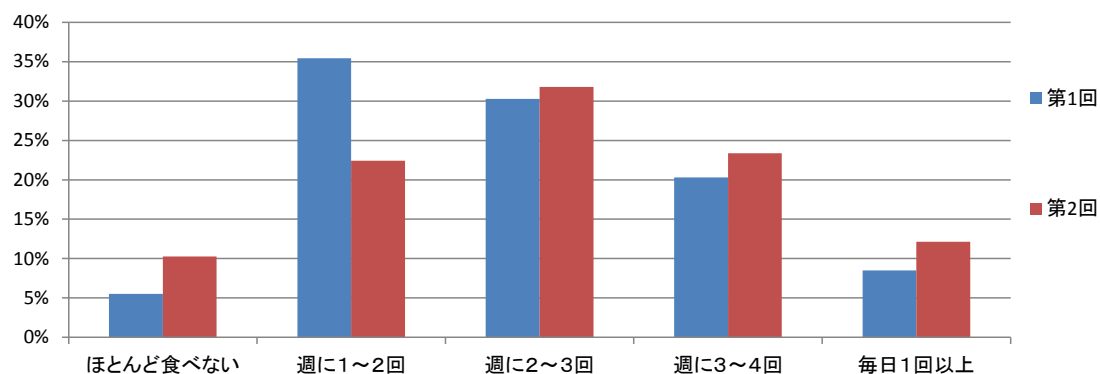


図 3-4-7 第 1 回および第 2 回アンケートにおける魚介類摂取頻度(1 週間当たり)

(5) 魚と肉の競合について

動物性蛋白質の食材として魚介類と競合する肉類との嗜好傾向を食事回数から比較をしてみた。肉類の供給量は 1960 年では魚介類の 1/5 以下の 14.2g(1 人 1 日あたり)であったが、急増を続け、2010 年には 79.8g と魚介類と匹敵している、こうしたなかで、「若年層は魚介類より肉類を嗜好する」と評されてきているが、アンケート結果もこの傾向を如実に現わしている(図 3-4-8)。

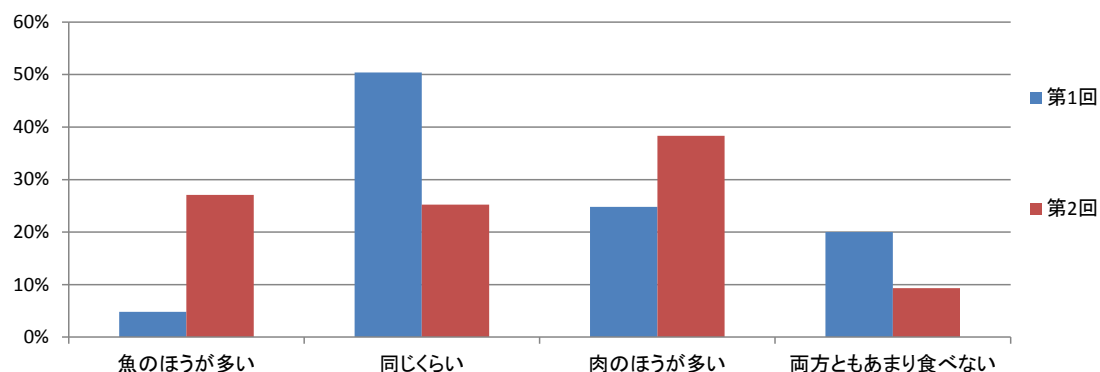


図 3-4-8 第 1 回および第 2 回アンケートにおける動物性蛋白質の食事頻度の割合

魚介類の食事回数が肉類を上回るのは 30 歳未満層では 39 人中わずか 3 人に過ぎないが、60 歳代以上 54 人を限定すると、半数近い 26 人となり、前述と同様に高齢者層の「魚介類嗜好」と若年層の「魚離れ」が再確認される(表 3-4-3、図 3-4-9)。なお、世帯構成や就業状況による大きな差異は見られない。

第1回目と第2回目のアンケート結果を比べると、「魚のほうが多い」と「肉のほうが多い」という答えは増えたかわりに、「同じくらい」と「両方ともあまり食べない」という答えは大きく減少している。その意味で、事業実施を通じて魚と肉の消費は増加していることが伺える。

表 3-5-1 年代別動物性蛋白質の食事頻度 単位: 人

年代	寡少	肉＞魚	肉＝魚	肉＜魚	計
10 歳代		8	5	2	15
20 歳代	2	18	3	1	24
30 歳代	3	35	17	11	66
40 歳代	6	47	21	9	83
50 歳代	1	14	8	5	28
60 歳代		8	9	12	29
70 歳代＜	1	6	4	14	25
計	13	134	67	54	272

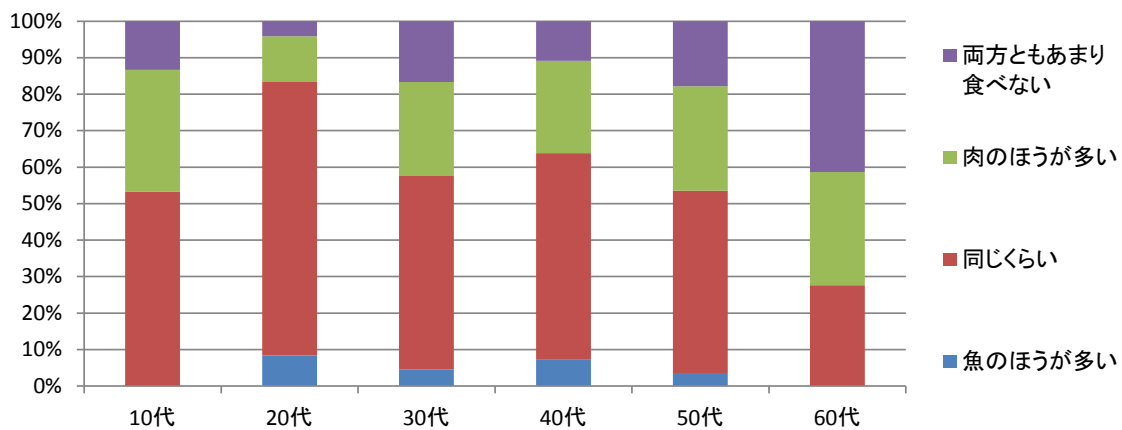


図 3-5-2 年代別動物性蛋白質の食事頻度の割合(第 1 回)

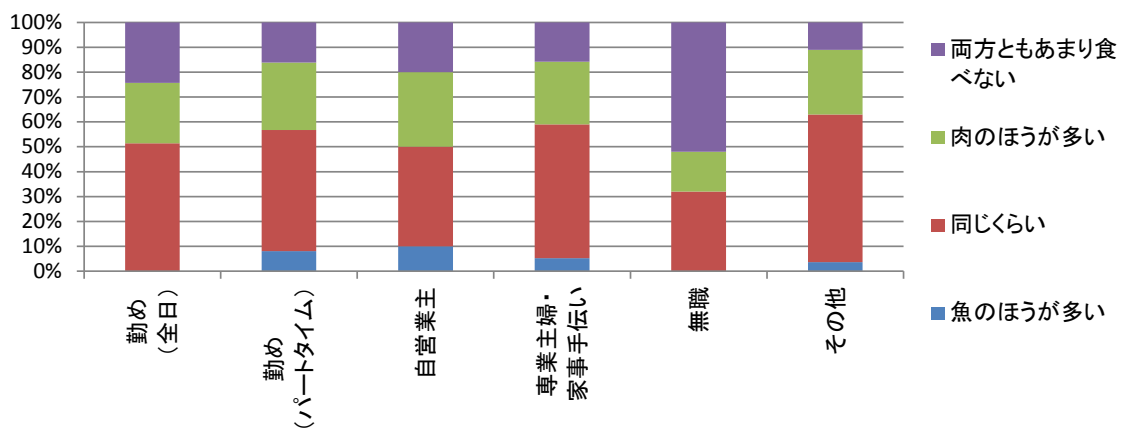


図 3-5-3 職業別動物性蛋白質の食事頻度の割合(第 1 回)

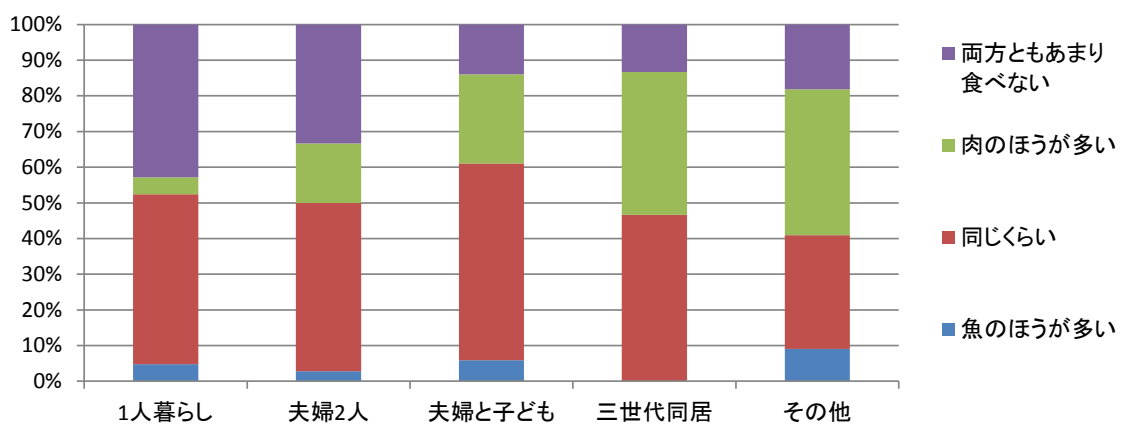


図 3-5-4 世帯構成別動物性蛋白質の食事頻度の割合(第 1 回)

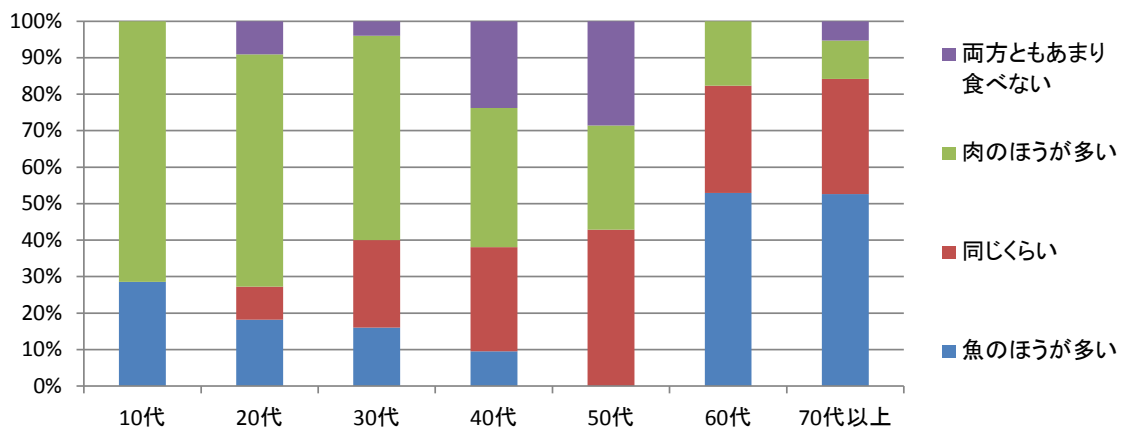


図 3-5-5 年代別動物性蛋白質の食事頻度の割合(第 2 回)

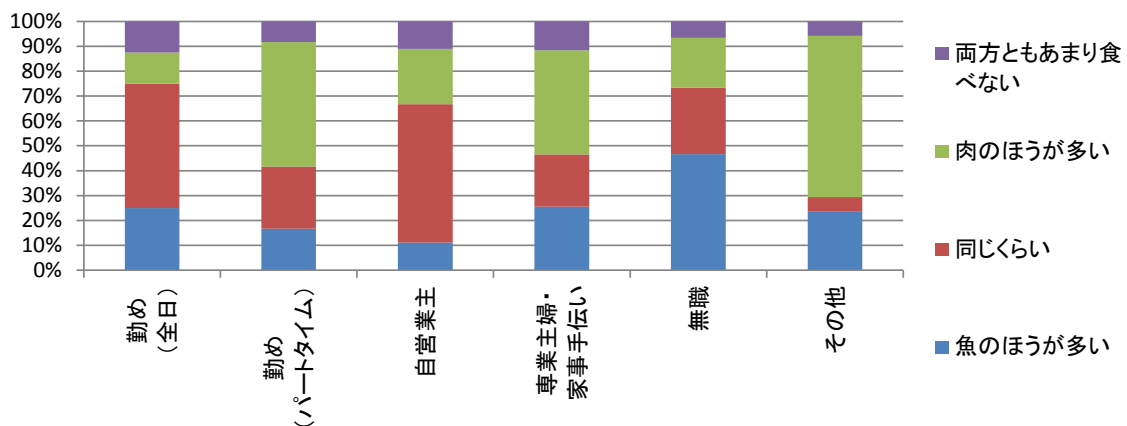


図 3-5-6 職業別動物性蛋白質の食事頻度の割合(第 2 回)

(6) 商品表示・情報提供への評価

これまでは、消費者側の食生活現況を中心としたアンケートであるが、加えて、小売店舗が表示する商品属性をどのように評価し、健康的な食生活への情報提供の頻度と活用への評価を問うた。

第 1 の原料、産地や栄養等の表示への確認に関しては、「いつもしている」「することが多い」が、年代、世帯構成や就業譲許を問わずに多く、有効回答の 88.0%を占めている(図 3-6-1)。

表 3-6-1 就業状態別情報提供の評価(単位:人)

就 業	回 答				無回答	総計
	A	B	C	D		
全日勤務	3	10	7	8	10	38
パートタイム	3	10	7	6	11	37
自 営	3	5	3	3	7	21
家 事	11	25	13	12	34	95
その他	1	18	9	12	14	54
無 職	5	6	1	6	5	25
無回答	1	1	0	1	11	14
総計	27	77	40	48	92	284

注)A:頻繁、活用している B::時々、活用している C:時々、活用せず D:提供していない

年齢階層別による確認状況を確認してみると、図 3-6-1 が示すように、30 代までは年齢とともに確認意向が高くなり、その後 50 代過ぎたあたりから確認意向が若干低下することがわかる。子育て世代となる 30 代および 40 代の意識が高いことが伺える。

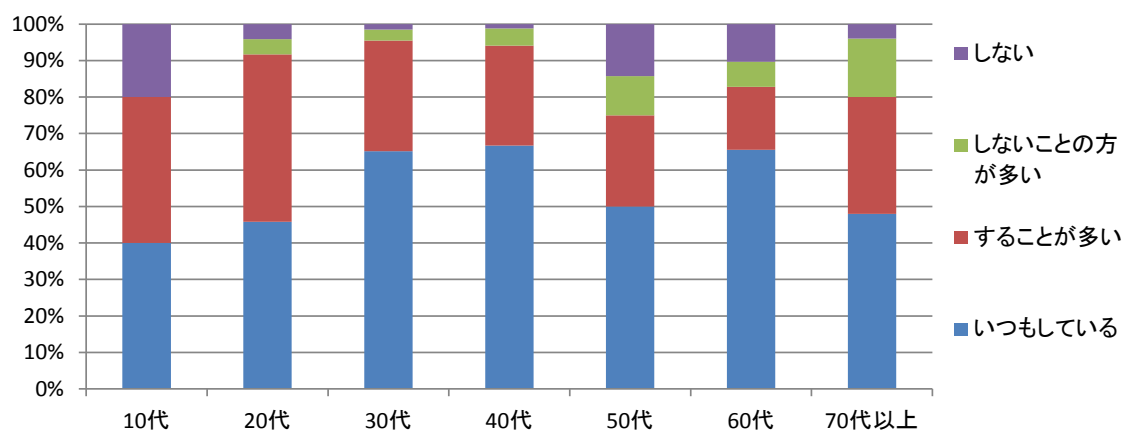


図 3-6-1 年代別の商品表示確認の有無の割合(第 1 回)

第 1 回目の結果に比べると、「いつもしている」という回答が減少しているものの、「することが多い」という回答が多くなっている(図 3-6-2)。

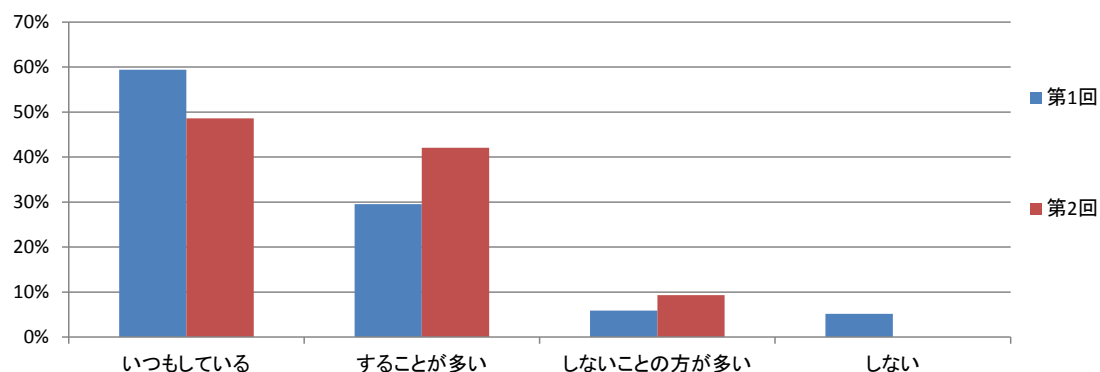


図 3-6-2 第 1 回および第 2 回アンケートにおける商品表示確認の有無の割合

しかしながら、第 2 の店舗が提供する情報への評価は、30%の 92 人が無回答となっており、消費者が表示等への関心の低さを意味している。何らかの判断をしている 191 人のうち「頻繁であり、活用している」と情報提供を積極的に肯定している消費者は 27 人(14.1%)のみである(図 3-6-3)。

この数値から推計するなら、購買客のほぼ「10 人にひとり」が掲示を生かしているに過ぎない。とくに、全日勤務、パートタイム勤務者の 75 人のうち 1/3 弱は無回答であり、回答した 54 人のうち「頻繁、活用」と積極的な評価は 6 人を数えるのみである。

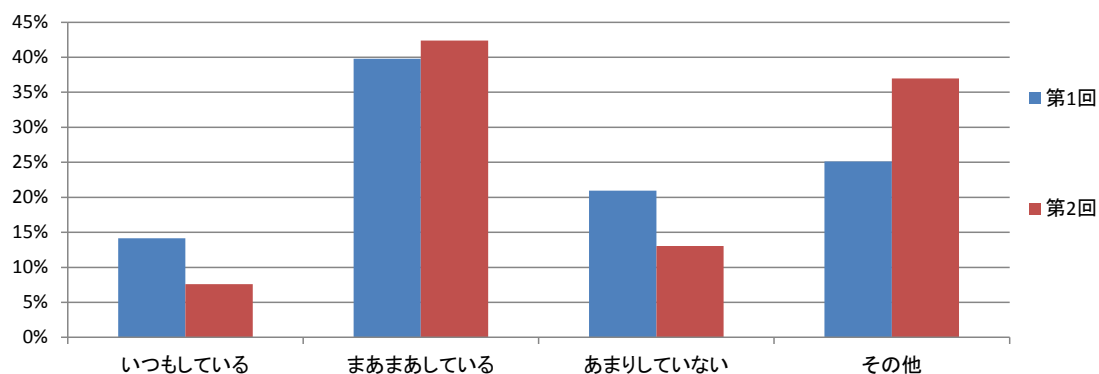


図 3-6-3 第 1 回および第 2 回アンケートにおける情報提供の評価割合

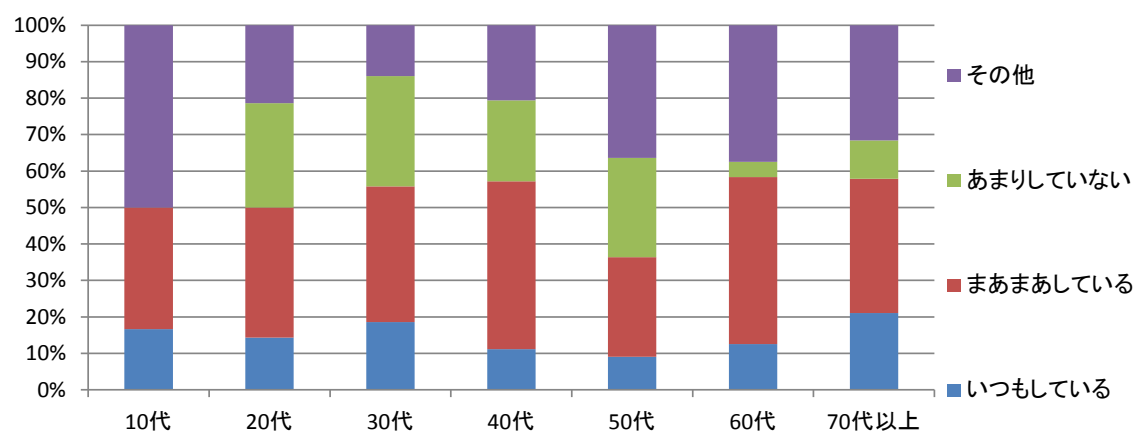


図 3-6-4 年代別の情報提供の評価の割合(第 1 回)